

川柳の雑記

麻生路郎 ☆主筆

Pensoj flugas trans la land - limen

The Senryu Zasshi

No. 298



三月號

昭和廿二年七月一日創刊
昭和廿七年三月一日發行
第三號
(每月一週一日發行)

創刊大正十三年・通卷二百九十八号

三月号目次

表題字……………麻生 路郎
紙……………石川兵太郎

新川柳評釋百句

昭和の作品から(6)……………麻生 路郎(一〇)
成駒屋と六代目……………堀口 埴人(九)
對……………大西 野介(八)
對……………石田 洋天(七)
釜山港にて……………櫻川 不水(六)
書連歌・俳諧・俳句・川柳……………藤本 満年(五)
許川柳・俳諧・花註解……………福田山雨樓(四)
柳壇人物論……………小畑自由朗(三)
窓口談義……………麻生 路郎(二)
雷成舎筆裏と管子……………富士野鞍馬(一)
不朽洞燭煙室……………鮎美・不死鳥(〇)
飛燕往來……………(一七)

★

不朽洞句帖……………麻生 路郎(一三)
近作柳欄……………麻生路郎選(一二)
川柳……………麻生路郎選(一六)
同舟近詠……………諸 家(一五)
一路集「教室」……………大森風来子選(一七)
各地柳壇……………奥村丹路選(一八)
不朽洞金名簿……………(一九)
不朽洞金名簿……………(二〇)
動……………(二一)
編輯局にて……………(二二)



窓口談義

麻生 路郎

句会で拔ける高句句が必ずしも古豪の作品に限られていないことを常に諸君は経験するであろう。古豪必ずしも名句ばかり創つてゐる訳でもなく、又創れるものでもない。然しながら古豪は古豪として、ゴツかにいゝところがある筈である。しかも句会に於て新進に高句を占められることの多いのは何故であるか。その第一は日々の生活が平凡なために、何を見ても何をしても、強い感奮性を放射することが出来ない精神状態にある場合、第二は句会当日特に、心身が疲勞しているか、いまいかが大きく響くようである。過度の勞働は精神力を低下させるからである。自分の駄作が佳吟に見えるのはそんな時である。第三は新進作家に伍して、張り合うだけの競争心が欠如していると云うよりも、抜けるとか抜けぬとか云うことに全然関心を持たないからである。古豪としては新進作家と高句争いをするよりも、古豪は古豪としての個性を生かした作品に精進すべきであることは云うまでもないが、句会となると多少ユルファン状態となるからである。新進作家の作品と所謂古豪の作品と比較して見ると、新進作家の作品には非常にムラがあり、出来、不出来に甚しい差のあることは争えない。それに反して古豪の作品には極めてムラが少い。しかも新進作家の作品が古豪の作品を飛び越して高く評價されるのはその作品が高度の感奮によつて生れてゐる場合が多いからである。古豪新進に限らず、作家として何物に対しても感奮し得ない状態に陥入ることは、恐ろしいことである。

パチンコのジャヤ／＼ジャヤにさえ私たちは感奮する。そしてパチンコの句が生れる。幾ら玉を入れても、一回もジャヤ／＼ジャヤと玉が出て来なければ忽ちにして感奮が消え失せる。はじめから誰が玉を入れても必ず出るものであり、玉がジャヤ／＼ジャヤと出たところで、タバコゴころか何一つ呉れないものであるとしたら、パチンコに対する感奮は湧かないであろう。例を車近なパチンコにとつたが、死と云う大きな問題に対しても同様のことが云えよう。仮りにタツタ一人の死骸にぶつかつても感奮と戦慄するが、毎日幾十の死骸を焼く職業人にとつては死骸は一つの商品に過ぎないので何んの感奮も湧かないに違いない。しかしながら作家にとつて、その感奮は常に藝術性を持つことを條件とするものである。

結婚式場



6 階

着付から 美容
墨式、寫眞、披露
まで 一切承り
ますので
きわめてお便利
てございます
金曜定休
大坂日本橋



松坂屋
大坂日本橋

最短時間で結ぶ
大阪・名古屋
3時間特急
毎日3往復
上本町 7:40 13:40 16:40
名古屋 8:00 13:00 17:00
特急料金 ¥100
近畿日本鉄道

本社三月句会

處—大阪市南区三休橋南詰東入
(市電心斎橋から長堀橋電停下車)
大宝文化会館

時—三月一日午後六時
題—家出・拾い屋・年度末

川柳雑誌社句會部



不 朽 洞 句 帖

麻 生 路 郎

掛軸が素直に垂れて寒いこと

おばアさんの部屋で鋏の音がする

死んだそうだと簡単に片づける

疊も匂い初刷も匂い

会社では横顔だけが見える位置

斜陽族紙幣きを刷りたい氣にもなり

八十で死んで立関の賑やかさ

あんたと一緒なら喰べますと河豚料理

新川柳

評釋百句

(VI)

昭和の作品から

麻生路郎

もう踏まぬ故郷ぞ柿え肥えをやる

(自由朗)

食い詰めて國を棄てる——だのに、まだ柿に肥えをやる、それは故郷への哀愁でなくて何であろう。生活から生れて来る句には斯うしたしみく、としたものを感じさせられる。ホントに匂いの高い句だと云えよう。その昔塩原太助が國を棄てる時飼いなじんだ馬に涙の別れをするが、それよりも、もつと現実的な心の痛さを感じる句である。寺の屋根でもいけない。村端すれの土橋でもない。それではロマンティック過ぎる。柿であつてはじめてこの句は生きる。

割箸を割つてもらつてやに下り

(路郎)

ちやぶ台に差し向いになつた旦那と女。女は横坐りに坐つてい

る。割箸まで割つて呉れとは云わないのに、女はサツサと割箸を割つて、「ハイッ」と差し出す。旦那はそれを黙つてうけとる。女も自分の割箸を割る。人が見ていないと、刺身をはさんで旦那の口え運んでやる。斯うした恋のいつまで続くか。

碁盤からの返事を妻はあてにせず

(五醉)

昔から親の死に目にも会えないと云われている黑白戦のことである。ザラ／＼ジャ／＼と云うパチンコなどは訳が違う。生きるか死ぬかの一目に全く生命を打ち込んでいられる際に妻の言葉などが、満足に耳に這入る筈がない。それでも「ヨシ／＼、そうしておけ」と返事だけはされるが、あとで、「そんなことを云つた覚えがないよ」と云われそうなので、妻はその返事をあてにしないのである。軽妙な穿ちである。

押入のついでに拭きたかつた肺

(山雨楼)

あわただしい生活をしていると、押入を片づけひまなどはないものだ。たま／＼胸を病んで会社を休んだ。会社は休んでも安静ばかりしている訳ではない。そこで雑然とした押入を片づけることになる。ゴミ／＼した埃りを清掃する。すが／＼しい気持ちになる。と同時に自分の汚れた肺もついでに清掃出来ないものかと思つたと云うのである。病人の持つ感傷がソク／＼と迫つて来るのを

覚える。

天二物與へりや家庭争議する

(章一郎)

天二物を與えずと云う諺があるが、この句はこの諺の引用句と見てもいいだろう。「與えず」ではなく、「與えりや」でこの句を生命すけているのも面白い。「家庭争議する」で、その二物が何んであるかを説明する必要があるいほどうなすかせてくれるではないか。

三べんに區切つたあくび母も老け

(岡王)

三べんに區切つたあくびとは何んど云う淋びしいあくびであろう。愚痴一つ云わぬ母ではあるが、この長い年月を生活と取組んで来た悪戦苦闘の皺があり／＼と刻まれているのである。子として云うべき言葉もない寂しい情景を巧みに詠んでいる。

財産として「ホトギス」子に譲り

(伍健)

恬淡無慾な父、花鳥諷詠に終始した父、その父に譲るべき財産のあるう筈がない。子規の短冊もあつたが何んべんも引越したもので、いつのほどにか無くしてしまつた。それでも「ホトギス」だけは手放さなかつたと、眼をしばたたく父である。

水貰うだけに女の暇が要り

(月仙)

寛から流れ落ちる僅かばかりの水に生命を託している人でなければホントにこの句の味は判らないかも知れない。雨続きで寛の水の濁つて使い水にならないことから先づ口を切り、口先きだけの

お礼ではすまされないので、コレは街の娘から送つてくれた何ですが、お裾分けしますと、お裾分けする品のことで一トくさり喋べらねばならぬいし、時には洗ひ物のお手傳いぐらいしなければならぬからである。

度し難き女なりけり後家を立て

(芳泉)

誘う水あれば、いなどとぞ思う後家の多い中に、誰が何んぞ云つても、ガンとして應じないで孤閨をまもりぬくと云うことは至難なことであろう。生理的に経済的に世の苦澁をなめなければならぬからである。しかも、そうした女に限つて世間からは度し難い女とされているのである。後家のひがみも、心然的な産物に違ひない。この句は、色ツばさの抜けた片意地な後家を詠んだところに特異な面白さがある。

その上によその子までが来て遊び

(日淵子)

「その上」で子沢山であることがうなづける。疊は摺り切れ、障子は破れ放題であろう。うちのことどもたちだけでウシザリしているのである。その上によその子までが来て、西部劇を演じるのではたまつたものではない。この句、上五の「その上」の措字を翫味すべきである。

機關銃のように怒つてもう忘れ

(風來子)

資本家とか重役とかにこんなのが沢山居る。学者にも居る。親分肌の人にも居る。要するに、この人種に属する人たちは頭の回転率が激しいので、声が大きいだけで心から怒っているのではない。その下に働く人間は、自分の呑み込みのわる

さや働きの鈍いことは棚にあげ、一がいに怒っていると思ふのである。問題にされていないことを考えず、あんなに怒つていたのに、もう忘れていふと思ふのである。この句から、そうした下ツ端心理がうかがえるのも面白い。

虚無僧はまだ幕末と云う姿

(太路)

虚無僧と云うのは昔は普化宗に属する有髪の僧で、尺八を吹奏しながら行脚したものであるが、今の所謂虚無僧は僧ではない。紅燈のちまたで遊客に呼びかけ尺八を吹奏する遊藝人の一種である。しかし服装だけは昔も今も殆んど変りがない。黒装束に深編笠である。チャンバラ映画に出て来る虚無僧姿そのまゝで確に幕末と云う姿に違ひない。



釜山港にて

潮丸通信長 櫻川 不水

前略御免下さい。目下昔分は魂のこけた朝鮮人吾太を偲ぶ釜山にゐて揚荷中です。久しぶりに見る釜山の山々はすつかり禿け盡して赤い粘土さへ露出してゐます。曾ては赤い灯青い灯が流れて船乗りの旅情を慰めて呉れた街にも薄汚なく黒ずんで太陽のない土地へ来た様です。凡ての棧橋は人間を殺す爲に使用される優たるものです。これが光輝秀な鋼鉄製品計りです。半ある独立を宣言した大韓國

追伸

の現状です。円價は日本の二十六分の一で、レイメイの釜山は零下五乃至十度です。船の窓から覗いて見るとこの寒いの何やら黒いものが風の吹く防波堤を動いてゐます。人間です。波に打ち寄せる僅かの板切れを拾ひ、竹の先で何やら海藻見た様なものを掬つてゐます。燃料と食料にするのでせう。朝早くでないとい他の人間にとられるのです。釜山へ来る途中補油のため門司に寄港しましたので灘銘酒五本とサントリー一本仕入れました。釜山碇泊中飲む予定でしたが一夜にして、酒三本サントリー一本干して終ひました。他の船員や鮮人の人夫頭や人夫達に振舞ひました。更に翌日懇願されて生命より大事な一本を分けてやりました。お陰で残り後一日分しかなく今更ながら淋しくなつて來ました。少し景気がよいと万事がこの通りですから一生貧乏で終る事でせう。久し「川雜」を見ません。釜山は燃料、衣料、食料、飲料水、雜貨、医薬……と凡ゆる面に沸底して実に慘澹な事です。これが光輝秀な鋼鉄製品計りです。半ある独立を宣言した大韓國路郎先生

釜山にて十日夜(一月)

不水拜

「飛燕往來」其の一 社宛



平塚市 木村 孤浪

耳に爪に國辱を感じ寂しくい
値段見いゝ湯豆腐と決めた丈け
年の暮三等重役に一寸ひがみ
完璧のスタイルで息子ダンス也
高島田丈けでいゝのに顔があり
生字引に満足して父であり
停年に父は奔馬のまゝで退き

大阪市 武部 香林

正月をめでたくないとなぜ僻む
蛙食いに似たる生活も差し向い
現金を女に見せてけちくさき
未亡人子の育つまで社長をし
酒飲んでやるかと或る日の未亡人

奈良縣 上田 翠光

約束をきつちり守る哀れさよ
もどかしさ碎ける程に抱かれたし
和服着て何処か空気がもれるやう

横浜市 福田 山雨楼

ロンドンの霧をよるこぶ女史視察
ネオン消ゆされど汚職は後を絶たず
晝は猫夜は鼠の台所

ホノルル 内藤 草一郎

見つめられモンキー蚤を取るを止め
尻位たゝいて欲しい素振りなり
笑い声キヤツは離に居る様な

新國劇を鑑る

尼崎市 水谷 鮎美

武蔵孤獨の沐浴の初日の出

京都市 村松 夢裡

さどられぬつもり知人の顔をさせ

あけすけにものを云ふのも金があり

きよとんとしてパチンコヤの前に立ち

大阪府 西尾 栞

干大根生駒の山を低うする

ヨゝと泣いておいて外さんへ嫁ぎ

女房のいつち嫌いは炭坑節

彼は酔ひアダムを連呼する

大牟田 高田 抱逸

両親が亡いのがパチンコ上手なり

三味線を長屋で聞けば哀れなり

月掛の旅行女中にみくびられ

米子市 三鴨 美笑

大部屋へ案内されて寒う居る

本妻の方の話がこまかすぎ

女房の金にはふれぬ共稼ぎ

ホノルル 白砂 旋風

此の人は生き抜くと看護婦のカン

高税に練齒磨を絞るやう

名古屋市 吉田 水車

十二月抄

鮭の身もネオンも赤い十二月

悠々生花を買う十二月

十二月ラヂオいきなり切られたり

勝手口開けつ放しの十二月

鳥取市 大西 八歩

正月の静けさに降る牡丹雪

長命の子にも孫にも先立たれ

大阪市 須崎 豆秋

明けまして目出度くもなし風邪ぐすり

けつきよくはミミズ煎じたので治り

何時からかほんまの歳を見失ひ

すばらしい天気へ廻轉椅子を向け

大阪市 竹内 潮花

祝ひ酒ポートワインですむ夫婦

年玉をかせぐ心算の手をつかへ

百合活けて見ても心のさわがしく

品物の様に男をうばひ合ひ

初詣まつすぐ帰ることにする

女房の眠むたい夜は眠くなく

奥さんと呼んで女房に猪口を差し

下関市 櫻川 不水

風の神おいらに恨ある如く

宝劔を棄てゝも見たい大暴風雨

弱点を素直に見せて可愛がり

姫路市 夷 一笑

暖冬が吹飛び鏡餅われる

にきびなどつぶしてござるストの朝

白髪白髪よさびしがらすな

岡山縣 大森 風來子

長女長女あたしは家の人形です

事務的な言葉愛人まごつかせ

結論が巧に言えて淋しい娘

六十になつても嬉しお元日

P.T.Aやつぱり寄附の事なりし

鳥取市 中島 鉄洲

友情の予定にもないどこで呑み

風邪に臥て悟つたような話する

K君の場合



一年を遊んだことも昨日まで

鳥取市 杉谷湖山

幸せは兒等両方にぶらさがり

つまづいた予感にばなく断られ

人生を割り切る如き医師のメス

いつの日に税吏え笑ふ日やあらむ

再軍備子等ビストルを持ちたがり

正月風景

姫ばかり通るところす靴みがき

夜は更けぬ波長をかえて妻は編み

黙否権あるを近頃甥は知り

名物といわれ兎に角ほめておく

子供達者な塵箱の嵩

人生は風の中なる水の如く

乳房を吸ふ顔恍惚として見る

旧友へ俄然女房の能弁なる

ハイキングへキツしたさにさそつたが

不平組上座へ尻を向けて吞み

懐手巧に法の裏を抜け

乗越へ汽車は朝までない返事

たゞ賀正なんといろけのないハガキ

葡萄酒に酔うてる父がさびしすぎ

人生に因縁と云う良い言葉

大阪府 上田春柳

大阪府 岸南柳

大阪府 松江梅里

大阪府 兵庫縣 田代尋四

大阪府 岡山市 藤本茶々

大阪府 岡山市 藤本茶々

大阪府 岡山市 藤本茶々

大阪府 岡山市 藤本茶々

ゆきだけの合はぬ羽織で悔みに來

戦後派は誰憚らず腕を組み

乳バンド取つてと甘い声になり

夢にまでストリッパの乳房揺れ

老婆の乳房孫にも見放され

女学生乳房で春の風を押し

岡山縣 直原七面山

子があんで親が來ているパチンコ屋

子供部屋もう白粉の匂がし

子供皆味方に妻は強くなる

男の手に葱一束も淋しけれ

アルバイトとてまさか案山子になれまいて

恋のむくろ残して哀れ人妻

バットの吹殻にも赤貧の迫ること

藝術は永久に孤独の背の丸味

佛様の数の多いのに迷わされ

欺されて寒梅社長の家で咲き

雪の風呂青い眼の子を連れて來る

納棺のやうにマネキン箱へ入れ

別れてはみたが実家も金詰り

霧の夜のネオンに恋が欲しいなり

僕だけが新正月をしに出掛け

あれほどにせめて酔へたらなぞおもひ

正月に來い／＼言ふて鍵を掛け

今度の家はなぞと借家の分際で

客なればこそ女手の家がもて

迷ひ子は聴くだけ聴いて放つとかれ

兵庫縣 田代尋四

兵庫縣 田代尋四

兵庫縣 田代尋四

兵庫縣 田代尋四

尼さんの暮しよ遊びに來てほしい

妻が留守主人が留守と大晦日

子沢山北枕など言ふとれず

話すことないのに逢いたき友のあり

脛かじり食うこと言うこと達者なり

着たままでボタンつけるもベタハーフ

他人の恋芝居見るより面白く

発車ですどなたも覚悟願います

深窓の幸ちは晴着の苦情など

大晦日女をくどくひまがあり

元朝のまだパーマ屋の人いされ

三次会俺の眼鏡はどこへいた

おごつてやつたジャケツの赤さよ

商談の桁の大きな女だまりきり

調節をして共稼ぎまだつづき

大関の夢破れ仲間するばかり

貸す貸さぬで重い空氣になつて來た

猫抱いて寝てる老婆とはなりぬ

起きて居るものに鼠と俺が居る

女だてらにすき焼へ輪を囲み

岡山縣 直原湖月

岡山縣 直原湖月

岡山縣 直原湖月

岡山縣 直原湖月

岡山縣 直原湖月

岡山縣 直原湖月

岡山縣 直原湖月

岡山縣 直原湖月

岡山縣 直原湖月

岡山縣 直原湖月

岡山縣 直原湖月



縫紋でお給仕をする三ヶ日

くさし合うて酒波みかわす友のきて
一つしか知らない藝を人がやり
もう少し寄れどカメラへ老夫婦

大阪府 西 いわを

友情が僕を悲境へ追ひ込んだ
お名刺を頂戴妾は一人者
夢を追ふ工学博士闊歩く

岡山縣 高山 朗 笑

相愛の仕草時折り子供に似
葉の落ちて見る大木の淋しけり
口惜しさ部屋をせましと立ち歩く

岡山縣 横部 牛 歩

火元だけ火災保険をつけていた
愛情に飢えて場末の灯を泳ぎ

岡山縣 服部 十九 平

二次会の席へ無粋な電話が來
慰勞会紅一点が草疲れる

尼崎市 長谷川 三 司

戯れの恋とは淋しホールの灯
孝行の初めと云わす毛のシャツを
元日を己は茶漬だとも云へず

大牟田 中村 五 醉

小便をしに來たような百貨店
ベカラスの多い國だと僕も思ふ
君が子をもつてみると男のネンネコ
外人の瞳に燃えやすい家がたち

熊本縣 有 働 芳 泉

常識はゼロの学位で食っている
東海道名刺を交わす商賣氣
この漫画御覽と妻のあてこすり
仁玉の様な手で握られてオメデトウ

香川縣 大西 迷 窓

ひまわりの裏で二人は抱擁し

基準法無視され乍らも女事務

晴衣などつけず聖書を抱く女房

金を借れそうな友達見当らず

捨てた恋なのに或る日のやるせなさ
酔うた振りせねば乳房にようふれず

岡山市 延 永 忠 美

ストーブにあたるも下役氣を使い

悪いとこばかり親父に似て來だし
呑氣には見えて質屋も知つてます

滋賀縣 黄 瀬 美 秋

母の還暦を祝う

六十一床柱に似て光るなり

宿の夜眺え向きの雨が降り
料理屋の三昧が宵寝をいら立たせ

下関市 阪 田 良 坊

刑務所を出て人生をまた見つめ

下関市 石 川 侃 流

ふぐ料理もつたいたいと遠慮をし
手拍子へもう酒という味でなし

固苦しい年始さつさとすましとき
郊外はいくく白い雲が飛び

廣島縣 山 田 季 贊

あこひげが伸びたまんまでお正月
ストーブへ二日酔かど事務始

岡山縣 水 田 草 骨

碁を打っていると校長用を云い
本当に酔うた女を持て余し

履歷書を持つて火のない室で待ち
教科書を抱いて映画のキッスを見

玉野市 中村 た だ み

心臓はちつとも弱らぬ更生期
渡米して來てゴシツプを氣にかけ

日記帳今ごろ呉れてのしられ

卒業期もう税金を考へる

世論調査私も判りませんの組
はじめなる夫の位置を妻知らず

倉敷市 木村 千代 男

招かざるお客左のなぞをかけ
かくし藝女房の智慧で間に合せ

代議士の賀狀苦笑を買うただけ

垢じみて優等生の席にあり
妓ふとエブロンかけたいと思ひ

降職の不満へ子等は小さ過ぎ
横顔に魅されカルタを負け続け

石川縣 那 谷 光 郎

白足袋で押切るつもりかぬかる道
椅子テーブル位置が更つただけのこと

米壽まで生きてる上に保険金

パチンコに行く口実を見破られ
追放が解けてまた要るモーニング

大阪府 木村 水 堂



たっぷり

愛嬌たっぷり
B1 たっぷり



疲労と脚氣に

タケダ

錠・注・無痛注



成駒屋
六代目

堀口塊人

そこいくと成駒屋はんですわ。この人が舞台え出やばると、河内屋から、梅玉かて、魁車かて、びいんとはりきつて、全体にいきがかわりました。近頃の言葉で言うたらチームワークでなもんですな。そやよつてに、六代目は一人の時がよろしい。「うかれ坊主」ひとりでかつてによるこんどるとこが、何とも言えへん。みな「鏡獅子」が天下一品や言わへんけど、わてはそうは思いまへん。あれは、はつたりの藝、まけおしみの藝、で、ごや、わいよりうまいもんあらへんやろ、ちう顔が鼻につきますワ。「文七元結」かて藝はうまいみたいやけど、父娘の情あいが、も一つ、出てきよらん、藝の軽さに情が負けると、こつてりせんとこが江戸前のも、藝かもしりまへんけど、わて、あんなん好かんな。

なんせ成駒屋はんはよろしい。いつしよけんめいにやらはるとこがよい。「しやむろ船」ちうしよがうむない芝居がおましたあれは誰やらがハムレットたらしいもん、日本の事にしたんや、そややが、ちよつともおもしろいことあれへん。それに成駒屋はんいつしよけんめにやらはまんね。わて、みて、氣の毒になつてしもた。六代目にはそんなことがない。ぶしよもんや。わて、まんしゆの奉天の

平安劇場であの人の「寺子屋」を見た事があります。ほんならあんた。いままでたつても「女房よろこべ」がお役にたつたはやい。いうとこがおまへんのだ。そんなけつたいな「寺子屋」があるやるか。わて阿呆らしなつてしもた。東京は本場所で、こゝらは田舎やちう藝、そんないきまへんなあ。大体、わては、かぶきの写実ちうのが好きまへん。どうせ嘘やおまへんか。嘘なら嘘らしいしてこそ芝居や。「寺子屋」のよだれくりでも「助六」の股くさりでも「しばらく」の首切るとこでも「石切」の二つ胴でも「道行」のけつれでも嘘やさかいおもしろいのや。嘘のおもしろさのわからん人には芝居の事はわからしまへん。成駒屋はんは、はんなりと、舞台で夢を見せてくれはつた。さいぜん言つた、山科の場から奥さんや、お子達が但島へ行きやはる、それを障子の隙間から名残を惜しむとこ、棧敷からは、障子にかけた手の甲が二本見えるだけや、その手の美しいこと、氣がこもつてますが、うちでは成駒屋はんはんまに泣いてはるんでつしやる。成駒屋はんちうたら、だれでも、「紙治」や、「こたつ」やらはめはりますけぞ、栗山大膳から石切梶原まで立派でつせ。「陣屋」の熊谷から東京風の濫いばつかりが藝やない。大体デ〜もんは、こまやかいとこどつかしやなしに、大けなゆつたりとしたいさましいとこがおますのや。成駒屋はんは、なげんせ、舞台が大きうて派手やさかい、ぼんさんになつてからの花道

の引返みが何んとも言えまへん。
まあいちがいというたら、六代目は、五十銭の木戸に、六十銭の藝みせたり四十銭の藝しりしよつた。成駒屋はんは、五十銭の木戸なら、いつでも六十銭の藝せんといかんというつもりやつた。そやよつてに、銭はろとらんもんに、お二人の甲乙はわかりまへん。新聞の批評では、どうしても六代目の方が褒められた。それは東京の本場所であつて六十銭の藝見てはる人の批評やつた。わて等田舎もんは四十銭の藝ばつかり見せられたよつてに、腹ん中では「なんやしよむない、あんなんが日本一かいな」とおもてました。そこえいくと成駒屋はんは、ごなたに見せても、六十銭の藝やつた。藝人はこれやないと、いかにのやとおまへんか。(終)

マニヤーぢやないが私の右手の親指にたこができました。山雨楼氏に柔の剛の鮎美さんと評された私ですもの之位いはあたりまへですれ。

五十二の三枚目に成る灯も燐し

達 人 不死鳥

川柳人にはいろんな人がいる。川柳一路会古川氏はソロパンの三段だそうで、四ヶタの数を二〇〇。ソロパンでおくような速力で暗算で計算するそうである。私たちには嘘のよな話だ。

水谷鮎美



の洞朽不
室煙喫

麻生路郎著 水武書房版

川柳を研究したい人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して收むところ三十七講、平明で親切で、初心者には本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

取次御注文は

大隈市住吉區西五丁目二番五〇
振替口座大阪七五〇五〇

川柳雜誌社



對談

大西野介
石田沐天

野 介 沐天さんは随分以前から川柳を作つてられるんですね。

沐 天 いや、随分と云つても二十四、五年程です。

野 介 その当時大阪で活躍されてた人達はどう云う方ですか。

沐 天 路郎、水府の両氏は別として、須崎豆秋、水谷鮎美、三好革郎、岩本素人、出口雨町、庄万よし等の諸氏又物故された方では高橋かほる、西田艸樂、安井ひろし氏等ですね。

野 介 聞いてますのに、かほるさんと云う人はとても變つてゐたらしいですね。

沐 天 變つてると云つても別に氣遣いでもないが、酒を飲むと別人の様になつて我も忘れ人も忘れるたちで、愛嬌のある振舞ひをしたものです。句も何だか女性的な句に見えるけれども、その句評眼はなかなかどうして大した

もので、路郎氏に次ぐ名短評家だと常々思つて。いますこの人は滅多に他人の句評などする人ではないのですが、幸にして私は拜聴した事があり、その鋭い鋭角的な短評に敬服しました。

野 介 僕の柳友がかほるさんと浅野鯉峯さんの間に挟まれて心齋橋筋を歩いたんですが、かほるさんがとても女性的であり鯉峯さんがとても男性的であつたので、通る人が全部振返つて三人を見たそうです。どこで私の柳友だけにはまああの中庸の人間だつたのでこいつあ随分おかしいなあと思ひながら難波の終点まで来たそうなんです。そして別れ際にかほるさんから「あんな女らしくない女とは附合はんどきなはれ」と云われ、今度鯉峯さんと別れる時「あんな男らしくない男と附合わんどきや」(笑)と言はれたと話していましたが、然し二人と

もそれぞれ其の個性があるもので、その個性のまゝ生き抜いた人として、矢張りそれでいいんじゃないかと思ひます。

野 介 つまり川柳界に於けるスツルムムウン トランク時代だつたのです。現代の作家は何か一本線の足りないものを作り上げる創作意欲と云う様なものが缺けていて、所謂川柳戦後派の諸君達がつと大胆になつて自分自身の新しい境地を切開く努力がなくては大だだと思ひます。

うか。明日喰べる食物をどうしようかと考へている場合、普通の人格では良い句を作る余裕がない。今日の日本人の生活全体が、ものを生まないまでも荒蕪しているんじゃないかと思ひます。然し本當の藝術は所謂荒地的なものを掘り返し、勵き返し、その中から生まれると言ふことも事実はなんです。そんな意味で、若い作家達が自分の生活自分の周辺を切開くことによつて、よきびしい川柳が生れなければならぬと思ふんですが。

然しこの二十年の間に相当人も変り、又現れ、もうやめたのかしらんと思つてると又ぼつかりと出て来て、あゝ未だこの人が生きてるのか(笑)と懐しい氣がします。又雑誌で古い人たちの雅号なんかを見つけて、未だ見ぬ人を懐しんだりしてをります。そうかと思つと、市内で身近にいた柳友が亡くなつていてさみしんで見たり、例えば、柳壇の惑星と言われた森雞牛さんの死んだのも知らなかつたりする様な事もあり、又私と同じ頃始めたその頃二十才そこそこだつた柳友の友帆君が、健在だろうと思つていて既に亡くなつていたりしてつくづくはかなさを感じたりして

野 介 それは先づ作句する環境と云う風なものが相当影響しているんじゃないでしょうか。

野 介 私は川柳を始めてまだ何年にもなりません、その間感銘した句は路郎先生のを別として、白柳子さんが数年前に作られた、春日遅々として仁王さんねむくなり



選郎路

思ひきり笑つて見度い年の暮 東京都 石居 高志
何となくグテン／＼に酔い度い日
浅はかな望みを女捨て切れず
おかしさが 込み上げて来る娘の若さ
見限つたバチンコにあの奴が入れ
忘年会藝の一つも用意する
断念はまだ早かつたナスが出る

和子さん退職

今日きりさいよペンだこ袖カバー 愛媛縣 渡辺 曉童
十二月妻は理に勝つ丈けの事
統制撤廃只でもくれるかのように
ぬれた雀の目に風邪を押して出る
高下駄わ雨が上るさけつまづき
寝棺の方がいさゝか詩的ですよ君
知らないで死ぬ倅だこわすまい
社で飲んだ証拠折詰さげて去に 鳥取市 森本法泉子
大掃除社の番傘を忘れてる
大晦日非番ですから飲んでます

新年賀会にて

君が代斉唱明治生ればかり居る
一月某日
母と子と頬くつつけて朝寝して
親展で来たは保険の御挨拶
恩知らず数へて愚痴な父となり 廣島縣 黒本 芳泉
支店長位にやなる氣茶を運び

氣の抜けた夫婦けんかも年のせい
ハンストの言ひ分マイクして婦り
エビの如く寝る母上の苦勞性
未亡人アンマ風情に虚を突かれ
襲名はしたが藝迄受け継がず 今治市 長野 文庫
絵に描いた餅に等しい移民許可
盛り場に暇な御方の多いこと
退職をしてから行けば茶も出さず
及ばない奴は裏から頼みに來

勸誘員さすが病んでもよく饒舌り 貝塚市 上坂 朱人
老眼鏡までかけチャタレー読み耽り
子へ意見借金契約書まで出して
物干しへ出てゐる市議もオムツ干し
ばく干したパンツへ春の風が抜け

後輩へふつたお客はノーチツプ 大阪市 麻生 P O E
かりけりテンポに合はぬタクト振る
匂はせて五十円がの易終り
ニヤニヤとして客引につけ込まれ
小半日ズレた暮しを羨まれ

憧れは西行なれど二男二女 大阪市 兒玉わたる
社用族ある日茶漬を恋しがり
アルバムに祖母は袴で褪せていて
ダイヤルはどちも歳暮呼びつづけ
おしほりを出されメニユーを読み直し

簾がらを師走の風がもつてゆき 岡山縣 岡村 牛耕
地から生えたうな易者へ土ぼこり
デパートで赤い手袋買っただけ
連載の漫画時には氣に障り
さゝやかなへくりが出て泣かされる

晝めしへ何度呼んでも竹細工 吳市 余頃 紅兒
疊屋の針の早さも十二月



書評
年滿本藤

連歌俳偈俳句川柳

能勢、中村、麻生三氏著

日本文学は短詩文学から発祥したといつても差支えない。いわゆる歌鳥の道と称される和歌が日本文学のそも／＼の元祖である。明治の文明開化によつて外國の文学がとう／＼として流れ込んで以來、日本の文学界は形勢が一変したのである。従つてその反対に江戸時代までの日本文学は、和歌、連歌、俳偈、川柳などの短詩文学がその大部分を占め、まさに圧倒的な勢力をもつていたのである。

だから日本の文学史は短詩形文学を主流とし、その連綿たる系譜を説き來り、説き去り、そしてその背景をなす歴史的文学社会を余すところなく記述して然るべきものであった。

しかし多くの日本文学史に関する著書に接し、短詩文学の分野から眺めて、必ずしも満足すべきものではなかつた。率直にいつて、私達は短詩文学のみの日本文学史の出現を待望してやまなかつたのである。

そこで標記の著書が新刊として出版されたことは私達多年の渴を慰するものとして非常な喜びを禁じ得ないものがあつた。尤もこれは書名の如く必らずしも短詩文学史ではない。序文にもあるように「連歌

初日の出どてら姿の旗を出し
戦前は鶏小屋だつたここに住み
教室へ校長さんの音で来る
よその子に負けん氣親もたこあし
うつかりと前身みせた妻の藝
はめ^{るだけ}であいさつすんだらし
写真帖みるはあなたのひとみだけ
パチンコで本屋立読みぐつと減り
赤穂市 川西 去水
パチンコの玉のような人のいのち
退廳の其の直ぐ足でパチンコ屋
同 同
狗抱いて配給不足言ひくさる
同 同
判決を首すじに聞く被告席 吳市 松永四季無
帽子屋を開業無帽主義のまゝ
同 同
せなに来る寒さが不満置炬燵
妻の眼は秘書の縹緞を高くふみ
同 同
生理學聞く教室の扉がしまり 米子市 小西 雄々
共學の楽しさ趣味も変りゆく
同 同
母の肩もみ背負はれた頃思ふ
同 同
常識を疑いながらクイズ聞く
同 同
新宅え視察に母は孫連れて 岡山縣 大塚美能留
性典え妻は笑つて目をつむり
同 同
吠えりや氣に障り吠えねば氣に^{いかぢ}
同 同
初日の出拜して又も寝るとする
同 同
揉手する腰へ且ては劍も吊り 愛媛縣 藤田 博人
賣れ残る一人娘の口が過ぎ
同 同
雨滴れの音にブランが又替り
同 同
學成れど未だ止められぬ アルバイト
同 同
今更に思ひ出す秋曼珠沙華 京都市 鈴木加代子
人間が寝る頃猫は遊びに出
同 同
來客へ親子電球替へられる
同 同

上京だ 三船だ 女まだ若し
千円のいさかい長屋中聞こえ 京都市 村本 香果
お正月腰のビストル重たかる
同 同
ひとり子に夜が淋しいお正月
同 同
お妾の淋しさを知らぬお正月
同 同
平凡に暮せば春の日の長さ 京都市 佐久間折草
東北の生れなる程 アクセント
同 同
失恋をして看護婦になつたとき
同 同
看護婦の夜の机に泰次郎
同 同
税務署に今日も白髪の下げ 京都市 植村 和昭
お辞儀をば教えて連れる里婦り
同 同
保護法に必死にすぎる不倖せ
同 同
貞操を狙う酒とはつゆ知らず
同 同
パチンコの煙草は親父買うてやり 堺市 八木摩太郎
卒業へ今一息のアルバイト
同 同
スケールの小さい僕のお元日
同 同
宝塚の夢新婚はまだかなり
同 同
青白き灯にサキソフホン哀しかる 大牟田 小川 雅人
ハンケチの柄まで彼の好きな色
同 同
唇を嚙んで見ていたショウウィンド
同 同
役得はありませぬよが家を建て 愛媛縣 鳥井 川鳥
小鳥屋^{はなね}はひねるソプラノ・バス・アクト
同 同
病床の視線にイタチ狼狽たり
同 同
女もう嫉いてる涙少し溜め 出雲市 久家代仕男
咳拂ひされアベツクの手を離し
同 同
二等米余計な世辞も云ふて去に
同 同
支拂の爲の稼ぎであつたのか 今治市 黒川 秀義
万策が盡きた炬燵の不機嫌な
同 同
炬燵まで伺ひたてに行く料理
同 同

と俳偈と川柳とは、一つの系列をなす短詩
形文藝である。連歌が通俗化せられて俳偈
が生れ、俳偈の一体である前句付から川柳
が生れたのであるから、本書では、この
三つを一冊にまとめて、相互比照研究の便
をはかつたのである。

それでいて、かなり文學史的な役割を果
した好著として、一氣にこれを読破する意
慾にかりたてられるものがあつた。もと
もと本書は十四卷からなる日本文學教養講
座の一卷をなすもので、學術書または専門
書として、單独の刊行を企てられたもので
はなかつた。しかも、一巻の書物を三名の
筆者が担当し、連歌は東京教育大學教授、
文藝能勢朝次氏が執筆し、俳偈俳句は成蹊
大學教授中村草田男氏、川柳は東京大學教
授、文藝麻生磯次氏がそれぞれ執筆してい
るのである。

全巻を通じて一人の筆者が執筆していな
いため文章の長短、文体、解説の方法など何
れも同調していないのは一つの欠点とも見
られるが、それ／＼の筆者がまたその特長
を發揮しているのも興味がないでもない。
連歌の項は能勢博士の性格を偲ばれる筆
致で、簡明ながら親切な解説も加えられ、
連歌の概念とその發展の經過を知るには好
適な記述といわれなければならない。しかし、お
よそ文學の盛衰には、その背景をなす社會
がなくてはならない。惜しむらくは背景を
なす社會の説明は殆んどない。筆者は連歌
文學史を述べる目的は全然考えず單に連歌
の解説を試みるだけだつたからである。

ところが俳偈俳句の項を担当した中村教
授は、まさに俳偈文學史であつて、短文の
うちによくもこれほど纏めあげたものとし
て驚嘆のほかはない。もとより江戸時代の
説明においてもなか／＼用意周到であるが

押しの手で奥様に成り上り布哇 純香
 四十の処女憎まれる程金を貯め 同
 四十の処女はもつぱりビール飲み 同
 婦省せぬつもりか年賀狀が来る 倉敷市 野田素身郎
 やめてくれ恋の痛手にさわる歌 同
 道樂はパチンコだけという初老 同
 深呼吸母はそれをも見逃さず 大和 岩垣日本村
 成年へ愚の愚は酒で手をたたく 同
 父さんが片膝立てた鏡餅 同
 テント村明日はあの峰越えるのだ 倉敷市 安原 桂月
 借りて着た方が洋服よく似合ひ 同
 峠今客を降ろしたバスの音 同
 待されたた刺さる歯を抜かれ 岡山縣 太田 又州
 うなづいた手相見は二度も云い 同
 帖尻が違つたまんま除夜の鐘 同
 初対面期待はすれの女なり 岡山市 坂井 三葉
 新築は忘れた頃に出来上り 同
 娘今日テストをされるお茶をつぎ 同
 あら玉の年の初めにオール10 東京都 松井 蛙声
 正月の雨さらくと六区の灯 同
 成人の日にパチンコで顔が合ひ 同
 パチンコへ父子似た唇一文字 京都市 田中 南桑
 パチンコへ僕もやるよと社長来る 同
 妻なればエブロンからの酌もよし 同
 執行吏自分もほしい洋箏笛 和歌山 岸本 木魚
 別荘でゐて、借家で寝てもくれ 同
 泣き虫であつた男が社長なり 同
 父の日は無いが晩酌出るのなり 尼ヶ崎 赤木 紅山
 ドテラ着てもう守衛ではない 同
 尺八を吹く日隣は公休日 同

源氏源氏刀を抜かぬ御代がよし 具塚市 河楊 梵鐘
 氣の利いた男というがつけ届け 同
 官吏の頭でボスター審査され 同
 ビストルの孫へボツタリこけてや 大阪府 森本黒天子
 制帽の下は鋤鋤取つた顔 同
 世を勘ねて未だ戦鬨帽で朝を往き 同
 小鳥チユンチユン新日本のお元且 愛媛縣 青野天下堂
 退屈へ車内販賣のしかゝり 同
 初洗ひ去年の努力のにはひ喚ぐ 同
 賣る程に並べてこけしの女忠部屋 貝塚市 中村 淳郎
 憧れて来る看護婦の頬赤い 同
 投キツしたらアカンベして返し 岐阜縣 石神 古木
 首吊りし人の子も居て羽音の音 同
 長男は親父を叱る齡になり 宮崎市 野口卯之助
 ひき止めてまでも飯でも食て帰れ 同
 奴だこ幼き頃のまゝの村 兵庫縣 吉原 紅月
 貧乏な親をうらますアルバイト 同
 十二月さてもものん氣な牛の顔 高知市 松下一徹郎
 サラリーマンの良き大년을野球 同
 やつて来しにせアルバイト 愛知縣 尾崎 久平
 アルバイト身につきすぎて困る 同
 税務署が来るミマゲム目で知らせ 廣島市 福岡葉留路
 道樂をした手と分る踊りよう 同
 長女もう心得ている妻の留守 和歌山 浅川 桑南
 基仇に障子張りをは手傳われ 同
 紅椿ゴクリと落ちて南無阿彌陀 大阪市 横田 方眠
 講談本父がよんでる御元且 同
 地味好み恋とは全然別らしい 愛媛縣 近藤 佳子
 押賣りの品は知らずに追ひ返し 同
 その中に樂しみのあり炭を焼き 愛媛縣 米沢 曉明

明治以後現俳壇にいたるまでの説述は私達
 の視野に觸れるものが多いだけに、その詳
 述は一段の魅力を感ずるものがあつた。
 特に正岡子規が「写生」を俳句觀の根本と
 し、芭蕉よりも、蕪村を尊しとする行き方に
 鋭い批判を加へてゐるのは、大いに共感を
 禁じ得ないものがあつた。二百七十九頁の
 本書のうち、俳僧俳句が三分の二以上を占
 めてゐるのは、いさゝか頁を取りすぎた憾
 みがないではないが、連歌を担当した熊勢
 博士にしても、川柳を担当した麻生博士に
 しても、國文學者ではあるが作家ではない。
 ところが中村教授は國文學者でもあるが、
 俳人中村草田男氏であるだけに、熱の入れ
 方がちがうことを肯定せねばなるまい。
 川柳の項は私達の最も注目するところで
 一字一句ゆるがせにすることは出来なかつ
 た。同じ麻生氏でも、もし麻生路郎師であ
 つたならば、もつと私たちの興味を唆るも
 のがあつたであらうが、作家でない麻生博
 士の記述に齒がゆきを感じざるを得なかつ
 た。しかし柳組柳井川柳がとく選者とし
 ての存在のみを従来私たちは知らされてい
 たものが本書では作家としての柳井川柳の
 点にも触れ、
 めつちの蛙桂馬に飛んで行き
 古枯しや跡で芽をふけ川柳
 などの作品例を記している。「柳多留」の
 初期のものに多く作者名のないところなど
 から押して柳井川柳の作品は相當数に上つ
 ていながら、はつきりと川柳の作としての
 証明のつかないところから、作家としての
 柳井川柳がクローズアップされなかつたの
 ではないかが、本書によつて想像される。
 要するに本書は、文學史としても、解説
 書としても、完全なものではない。それで

貴い物少々太い足袋をはき 同 佐々木告天子
 産制論五人の母の苦笑い 岡山縣
 建てるのも早い火事に祇めらる 同
 スキャンダル何処吹く風タイプ打つ 岡山縣
 あふるだけあふつて組合総辞職 同 水谷 谷水
 光つての道具許りの新世帯 石川縣
 ボン／＼船の煙へ悩み忘れてる 同 細呂木魯木
 子宝が貸間探しの痛になり 岡山縣
 別れとは知らずにオーバ着せてやり 同 峰尾 魚々
 はしやいで居ることも云えず悔受け 玉野市
 枯草へ女のかほりを感じて来 同 渡辺あきら
 心臓で借つた晴着を着て歩き 岡山縣
 お達者でよいと言はれる不倖せ 同 難波 鴻峯
 もてなしのつもり親爺の根深節 鳥取縣
 玉垣に栄枯盛衰の跡を見る 同 亀崎 漫步
 手相より早三年は長く生き 岡山縣
 犯罪史読めば先祖の名も見付け 同 池田 松平
 誰か待つやぐら炬燵の派手な柄 高松市
 争えぬ性轉勤へ輩の如く 同 渡辺伊津志
 官廳はまだモーニング判くれず 貝塚市
 三越スト 同 宮本 甲馬
 越後屋のれんもストの風に揺れ 同
 交際え役人根性ぬけきれず 倉敷市
 弄ぶ乳房へ酒は出ぬものか 同 三島風來坊
 出勤の夫元氣に霧へ消ゆ 岡山縣
 肩書も虚榮もなくて臥しつゞけ 同 田中 敬貢
 名も知らぬ奴と握手をした屋台 岡山縣
 妥結せりと古新聞へ書いて貼り 同 伊藤 駄佛
 人工雨雀の涙ほどは降り 岡山縣
 もう春が芝生の底を痒かせる 同 西山 秀峰

呑みに行くとも書いてある年賀狀 高槻市
 背伸びして賽銭箱を覗き込み 同 福田 丁路
 月給日明日だつたなど失業者 貝塚市
 逃げるのを忘れてカナリヤ啼いてます 同 池内 両成
 同姓であつて汚職へ迷惑な 岡山縣
 大阪ですられ帰り雨に逢ひ 同 河野 徳丸
 出世して友愛称を喜ばず 出雲市
 花嫁へ驛員職務を忘れかけ 同 佐藤まさる
 正月の酒やメチなど出すかいな 兵庫縣
 同窓会老師も恋を弁じられ 同 酒井ひかる
 遠慮する二階へ提げて押し掛ける 下関市
 呑めと云う母の氣丈が有難し 同 中村九呂平
 待ち人の來ぬ元旦はしぐれてる 鳥取縣
 高利貸廣告なんかいるものか 同 徳持晚稻子
 踏切も程遠くない慄死体 大牟田
 杖の先感がくるうた袋路地 同 平井 吾風
 女房が出た断りに息を呑み 鳥取市
 中座して火事の方角聞いて来る 同 武田八方菜
 齒刷牙へ昨夜の酔がまだ続き 石川縣
 晴れた日の新春を並んで靴みがき 同 塩谷三思樓
 おちちやんと言はれ独身ちとあて 出雲市
 寒鴨の群アベツクを驚かせ 同 平井 芳風
 着ぶくれて持病春待つ姿なり 長野縣
 盲判乍ら眼鏡をかけ厳し 同 高峰 柳兒
 芋かゆの味ひきたてる寒さなり 愛媛縣
 やせがまんしたとばかり折れてくる 同 村上 旭堂
 お宅ではないかと火の手指さされ 岡山縣
 近所まで送つてねといひ月夜 同 浜野 奇童
 焼けなんだ羽織袴がチラホラと 山口縣
 脂粉だけ十人並といふところ 同 加川 大然

川柳末摘花註解

岡田 甫著

古川柳を研究するには、どうしても末摘花に突き当る。入るべきか、入らざるべきか一應は迷うのである。だが性の問題を如何に隔絶しようとしても、青少年はいつの間にか性の智識を察知してゆくように、川柳家へ末摘花眺むべからずということとは、全く無理な注文である。それよりも読む機会があれば読んで、こんなものであるかを知つた上、出来れば單なる興味本位としてでなく、學問的に解釈出来る程度の理解をもつべきものであると思われる。本書はやはり學問的研究書として刊行されたもので、序文に、

「俳風末摘花」の價值については、改めてここに贅言するにも及ぶまい。たとえば、新潮社版「日本文学辞典」には一項をさいて本書についての記述があり、新村出博士の「辞苑」(博文館刊)にも「すえつむはな」の條に、植物名及び源氏物語の章名と共に、本書の名もまた記載されているなど、夙に日本文学史上その價值を認められて來たにもかゝらず、



マフラーをよるに我が年忘れかけ 和歌山 岡崎 泰三
秀才でなかつたやつが家を建て 同
スカートのふくらみカメラは見逃さず 香川縣 中山中納言
年頃は易を信用してかゝり 同
千円で街を淋しく見て帰り 佐賀市 南川 光男
惚れてゐるくせにお多福^{なご}と呼び 同
頭数に一つ足りないもらい物 香川縣 安倍 寛子
梅の咲くだらう坂に犬と住み 同
ざこねして男はこんなものかいな 熊本縣 鹿本 実信
友情は悲し千円札よりも 同
洋服の裏返し着て貯めてゐる 京都市 井上 吉造
追羽根の歌になつかし京訛 同
春遠からじオーバーが値下りし 東京都 田中 稻水
文化都市廣場に裸婦像尻を向け 同
飲むと見た方へ銚子は向きをかえ 米子市 勝田 正郎
持たせるに豚兒と書いた依頼状 同
絶安にあはて、神の本を読む 山口縣 山田 潮鳴
神はある友はかく言ひ眠りに入らぬ 同
表彰の道も開けて世に知られ 大和市 戸田 嘉一
失業に妻の力があるを知り 大和市 戸田 悦子
金金と哀れ女の声がする 出雲市 森山 莊
光秀を賞めて老師にうとまれる 米子市 石尾 鈍頑
表彰も今は苦にする子 沢山 大和 村井 弘
借金にあつても晩酌かかさずい 岡山縣 神辺 繰山
はめる丈はめて勘定拂はす氣 大阪府 山崎帆加夫
安賣りの前ぶれ程に人は來ず 岡山縣 大橋 游子
天井のランプが低い西瓜番 京都市 倉田 錦川
旅靴雨はつれなく横に降り 奈良縣 平井 良兒
予告篇キツスをみせて期待乞い 京都市 若山 圭草
土地賣つてお嫁にやつた親心 吹田市 橋本 幸男

残り福足もと寒い雨となり 大阪府 青柳扇子仙
我が妻は良妻賢母年越せり 大牟田 新谷 風浪
人絹の服で正月満喫し 山口縣 多田 穂波
アルバイトのダンサーキツスもてあそび 愛知縣 太田 劍坊
弱身あり返信料も封入す 池田市 浅野 精亮
集金にいつも主人はお留守なり 愛知縣 津川 竹坊
殺人がある新聞とめしを喰う 大阪市 平井 立茶
政治家を夢見る子等のアルバイト 愛知縣 松尾 北雷
肺病に貧乏神が付いて来る 京都市 三上さんや
商賣氣出して銀行の年賀状 大阪市 松永 利行
電話口私で分る旦那さん 岡山縣 田村 藤波
諦めた頃採用の通知が來 倉敷市 安原 玲花
ひたむきな視線女に惚れなおし 貝塚市 古田 雨郎
子宝を笑ふが如し避妊法 岡山縣 北口 草人
吊革の高さへ花を上げて揺れ 玉野市 迫田美婦適
エプロンで子の失礼を拭いて去に 岡山縣 舟曳 吞長
一時間待つ身はつらいパチンコ屋 大和市 野田 勝豊
風よ吹くな父の無い子に お正月 大阪府 谷口 一昌
朝だけはお早うと言うほどの連れ 奈良縣 櫻井秋刀魚
松竹梅球場大きく飾つたり 大阪市 末松 藉兒
パチンコもアルバイトで家を出る 愛知縣 平岩寛太郎
樂しみを街に揉まれて肩が凝り 岡山縣 松村 意坊
家計簿にのせない金を母は持ち 岡山縣 小林 夢介
生きぬ氣処女のほこりを捨て 岡山縣 楳原 一善
停電に時計の音のシカとあり 富山縣 島村花都辞
二日酔ひまあ正月であつてよし 出雲市 和田 柳作
妻揚子くはへ通して晝が来る 岡山縣 岡田 夜潮
ニユールツクあれパンく^{かこ}子に問はれ 大阪市 永田六龍子
不幸者云われぬ所へ荷を忘れ 今治市 兼永 流舟
手加減の先生生徒に受けがよく 岡山縣 池田 古心

明治以降の封建下では、本書の醜刺は勿論
研究発表すら許されなかつたものだ。戦後
にもまた数回の醜刺が問題の対象となつ
たがようやく昨年末に至つて、これを眞面
目な学術の対象とすることは避けないう
新判例を得たのは、民主主義下の文化國家
としては当然であるにしても、とにかく従
來の認識を改めた大英断として、当局の措
置に敬意と謝意を表したい。

とあるように、學問の対象としてはじめ
て出版を許された本書である。末摘花
の全句ではないにしても、かなり多
数の句を集録し、信頼に足る考証と、
行届いた解説は、著者の態度が如何に
學問的な態度に終始しているかが十分
うかがえる。單に末摘花に限らず、古
川柳の著書として、これほど行届いた著書
は甚だ珍らしいと思はれる。一つ／＼の句
は、もちろん末摘花であるから、肉休川柳
以上のものである。それにもかゝはらず、
學問的、研究的著書の敘述が、まことに眞面
目なために、この著書から現実的な性慾感
を刺戟するとは思えない。むしろ、末摘花が
露骨な性慾描寫の句であるために、眞面目
な學問的視野からこれと取組むことを躊躇
するものが多かつたにもかゝはらず、本書
の著者岡田氏が敢然として、末摘花の研究
に突入した勇氣と努力に対し、私たちは大
いに敬意を表するとともに、天下に公然の
出版として私たちに一読の機会を提供され
たことに感謝するものである。

「チャタレー夫人の恋人」が第一審判決
でワイセツ圖書に非ずという判決を受けた
今日、末摘花の學問的研究書が公然と出版

一路集

教室 大森風來子選

教室へ張り出されたは父の作 芳 泉
 教室で童心に返るPTA 悦 子
 教室の視線をうばう消防車 同
 教室の窓を先生の子が覗き 自由朗
 教室の日当り先生風邪の氣味 同
 隠し場のない教室へ空氣銃 木 魚
 教室の選挙小ちやい口動き 英 子
 教室のこども小さきボスが居り 鉄 兒
 先生の來ぬ教室が叱られる 同
 教室を土足で汚すバザーの日 卯之助
 教室の修理の寄付がまた廻り 敬 貢
 教室の窓へようしやのない暴風雨 若 芽
 教室へ雀が入つたさわざよう 莊 まさる
 遊廓の見える教室非難され 齊 花
 肖像は教室が生んだ人 水 堂
 教室で我が子の頭脳疑はす トン坊
 お料理へ隣の教室やりきれず 美 嬌 適
 先生の似顔が叱られてる教室 同
 叱られている教室へ鐘が鳴り 摩 太郎
 雨洩れる教室知つた綴方 光 郎
 窓ぎわの夜学は月が氣にかゝり 同
 新任の教師は渾名と知らず消し 同
 教室の至宝万年助手である 同
 共学の室に化粧の香が残り 五 風
 教室でズボンの折目氣にして居 同
 教室の中はがらんといい天氣 同
 教室の外から母は傘を見せ 山 雨 樓
 分教場バーマの先生赴任する 正 司
 分教場父娘がかわるがわる行 同

教室の不平冬日が届かない 美能留
 欠席の机に先生座り込み 同
 スリッパの音から教室静かなり 同
 PTAとや／＼教室覗き込み 同
 はいはいと一年燕の子のような 同
 教室で教えなかつた呑みつぶり 同
 教室へヒカツのよな圖画を張り 五 風
 教室の喧嘩こつり足でする 美 嬌 適
 女教師の傷手教室でも疼き 自由朗
 教室が足らず産制論が出る 雄 々
 教室のように女生徒従はず 方 大
 級友の美談が教室しんとさせ 美 嬌 適
 共学の穿いきそつと覗いて見 同
 教室は社会科らしい笑聲 同
 教室の日当り近視の子が育ち 同

朝

奥村丹路選

朝の道思ひ出せない人に会ひ 良 坊
 雲行が朝から悪い主任なり 木 魚
 朝を出す玄關すらりと菊送る 自由朗
 朝の雲一日傘を無駄にした 同
 朝寝する女房に今は養われ 芳 泉
 金のない家にも朝日さしてくる 英 子
 片方の足袋がないとて探す朝 卯之助
 今朝からは見送のある背廣服 同
 不氣嫌な朝を雨戸は知つており 同
 ビルの朝金庫の様な扉が開き 雄 々
 変人と言はれて朝を早く起き 同
 弁当の温みに朝の幸を知る 同
 倦怠期二人へ溢い朝が明け 太 路
 元日の朝まで詰めて夜替いに 同
 パチンコ屋朝から客のある時世 美 嬌 適
 早い朝鳥も近所で寝てたのか 山 雨 樓
 事故なしと書いて宿直朝になり 同
 つましい女に復つた汽車の朝 同
 新妻の今日から磨く朝の靴 光 郎

朝刊が枕へ落ちるバラック家 五 風
 朝食へ家中そろうが嬉しいな 同
 一番の汽車から村は朝となり 方 大
 ふつか酔もせず社用族朝出る 正 司
 里の朝無声映画の様に明け 美能留
 木枯しの朝嫁だけが起きており 同
 朝になりや屹度謝るくだをまき 同

【飛】 【燕】 【往】 【來】

福田山雨樓氏 (横濱)

路郎宛

啓・先生が暮れからお休みになつていらつしやると承りお案じ申上げております。(中略)

去る十一日の夜突然酒井駒人兄が病床を訪れてくれました。年賀狀に「働けぬ身をもてあます病室」の句を添えましたので心配して見舞つて下さつたのでした。久し振りに見舞つて下さつた柳について語り二時間近くも話をしました。東京柳壇も区々に分烈して中心を失つてゐること、横濱柳壇が相も変らず雑誌を出したり引つ込めたりしてゐること、このごろ難解の新しがりの句が多いこと若し連中が先軍を遇する道を知らぬことなど大分議論の花を咲かせました。あとで小生が妻に、仲々よく話をした人だね」と申しますと妻が「どちらがよく話したかわかりはしない、お父さんの方がよくしやべつていられた」とひやかすのでした。娘はまた「向う三軒兩隣の亀藏さんのような方だつたと一大笑い致しました。やはり小生はしやべり過ぎたのでしよう翌日一寸熱が出ましたが。(始めから寝たままでした) 敬具

されるのは当然かも知れないし、川柳の作家、研究家がこれを購入することも、大いに推賞して可なりという結論に到達するであらう。

しかし、かつて路郎師が、七面山氏の肉体川柳に対し、末摘花と紙一重である。その一線を越えないようにという忠告を與えられたことがあつた。私はそれと同じ趣旨で、末摘花の作品は、研究対象とはなつて、今後の私たちの作品に取り入れる境地に取り入れるものでないことは絶對的である。

さらにまた、未婚の青少年作家諸氏には、必らずしもお奨めしたくない。それは古い封建的な考えからではなく、性の教育は科学的または医学的な面から除々に吸収すべきものであつて、既教育者でないといふ判りかねる句境をいきなり幼い人たちに見せることは句の價值判斷よりも句境から来る刺激が強すぎるからである。ただ巻末の「末摘花」解説は、川柳文学史としても秀れたもので、簡にして要を得た解説文は何人といえども讃辭を送るであらうと思われる(東京都港区芝新橋一ノ三二第一出版社発行定価二五〇円)

(筆者は山陽新聞編輯局長・川柳不朽洞会員)

避妊のために

サンデー

セツト 250円
 セリ 205円
 同上 50円180円



柳壇人物論

福田山雨楼

一、柳壇人物の種々相

柳壇で人物と云へば故劍花坊のような傑物を先ず想像する。劍花坊はその閑歴、功績、名声等から云つて川柳史上比類少き人物であつたことは誰しも認めるところである。この外故人では久良伎、三面子柳雨、六厘坊、角窓坊、鈴ン坊、青明、卯木、百樹、東魚五呂八、錦浪、松窓などが最も惜まれて去つた人物で、それぞれ一世に傑出した事歴を遺してゐる。次に柳壇の人物としてわれわれの脳裡に浮ぶものは、現代の柳壇をリードしている吟社主宰者である。路郎、三太郎、周魚、水府、雀郎、紋太氏らの所謂元老格をはじめとして全國に亘る吟社主宰者の数は少くない。更に吟社こそ主宰してないが中央、地方に隠然たる勢力を有する古豪、例へば〇丸、迷亭、溪花坊、久留美、佐健、南北氏らの存在も亦柳壇の人物として尊敬せらるゝところであ

る。多くの川柳家はおよそ以上のような概念的觀察の下に柳壇の人物を目しているようである。従つて柳壇の人物とは仲々達し難いもの、数の少きもの、範圍の狭きものという風に考えられ勝ちである。ところが柳壇にはこの外になお幾多の人物層があることを知らねばならぬ。今それを大別して見るとおよそ次のような部類が考えられる。

一、作家オンリーで絶えず佳吟を創作する名作家、二、句会の運営や雑誌の編集、出版に手腕を揮う実務家、三、古句考証や史的研究に學問的寄與をされる研究家、四、評論批判の筆を以て示唆と反省を興うる評論家、五、新人の育成、後進の指導に努力を拂う啓蒙家、六、川柳を廣く社会に進出せしめるようその地域聯域を通じて奮闘するジャーナリスト、七、柳壇の躍進に資するためその資力、地位等を善用する有力家、八、選句

の適正と授け家の個性を伸ばすよう努力するよき選者。このように柳壇の人物は隨所に散在しているのである。それらの人物があまりに身近く、またあまりに謙虚にわれわれの周囲に群がっているために、つい見忘れ勝ちになるのである。親しさに慣れて尊敬の念を失い勝ちになることが多い。われわれは更めてこれら熱心にして誠実な川柳家に感謝を捧げねばならない。同時にこれら川柳家が柳壇の人物たることを自覚し、負託に應えるよう自重と研鑽を怠らず益々大成して貰いたいものである。

実は本稿を起すに當つて手許のノートを見ると、自分は昭和十四五年の頃から「柳壇人物論」を志しその所懐を世に問わんと考えていたのである。しかもその主眼とするところは人物の種々相を闡明することにあつた。人物の自覚と認識とにあつた。川柳家は稟質的に俳人に劣ると卑下した

り、吟社主宰者でなければ人物でないと思合点をするような認識不足を捨てて、前に列記したような誠実で熱心な川柳家を心から尊敬し、またこれ等の川柳家が層一層自分を寛深めて活躍されるよう要請したかつたのである。

元來川柳家は自ら歌人俳人としての類を異にし、庶民的、市井人的性格が濃厚である。その限りに於いて階級とか列序を排する氣持が強く、四民平等、一列一体の觀念が支配的である。殊更に人物として畏敬したり、殊更に胸を張つて威を示すことを好まない。それは確かに美德であり、モラルであるが、錯覚、認識不足、無自覚であつてはつまらない。誇示する必要があるが卑屈に流れ抵抗の精神を没却しては困る。内に高いプライドと逞しい意氣を秘め、外は明朝潤達親しき仲にも礼儀を忘れぬ態度こそ望ましいと思ふ。自分は説教を試みようとも思わぬしその資格もないが、信念だけは捨てたくない。全國に数多く散在する柳壇の人物各位に對して、茲に筆硯を新にして健吟を祈る次第である。

二、人物の國土的分布と歴史的傳承

北は北海道から南は四國、九州に至り川柳は行亘り川柳家はよく分布している。そして戰國時代のように群雄が割拠している。鬭争や征覇のためではなく川柳文化の交流と發展のために平和的對陣をしているのである。戦争前は鮮満、台灣、樺太にも有力な川柳家が少くなかつた。國民と共にある川柳のことだから、地方々々の集團を中核として浸透し進出してゆくことは異とするに當らぬが、期せずして各地に人物が輩出すること同慶の至りである。勿論文化が上昇線を辿つてゐる今日、中央柳壇の知性と波紋が地方に傳わり地方柳壇の向上と躍進に拍車をかけてゐる事実は否定できないが、地方地方で絶えず中心的人物が族出することは奇妙と云うか攝理と称するかこに角感激の外はない。二三の顯著な實例に徴して見ても、寒風荒寥たる北辺の廣野に新興川柳の團將田中五呂八を生んでおり、山岳重疊たる信州の山奥に篤學研究家の母袋未知庵氏を産してあり、南風騷蕩俳句王國松山の一角に名望家前田伍健氏を挙げている等、人物の出現は実に興味津々たるものがある。國が人物を生み人物は國土に育まれるのである。試みに古人今人十指の傑物を捉えてその生國を洗つて見ると、

劍花坊は長州、久良伎は武州三面子は岐阜、六厘坊は浪速の産、また三太郎、周魚兩氏は東京ツ子、雀郎氏は宇都宮、路郎氏は尾道、水府氏は鳥羽、紋太氏は神戸の出身と云う風によく分布の綫をなしている。

久良伎翁は老の一徹から川柳は江戸情調のもので、江戸ツ子に非ざれば川柳を語る資格がないと迄極言されたものだが、翁の所説が如何に固陋偏狹であつたかは右生國分布の一事を以てしても分明である。

更に布石の妙を極めたものは古句研究家の配置である。これを故人に見れば葉山に三面子、東京に柳雨（終焉の地は福岡）梅仙、横浜に卯木、幻怪坊、文部省に三根、信州に花月、岐阜に木卯村、大阪に百樹、虹衣、神戸に虚心、京都に頼原博士、松江に眞弓、北京に東魚（名古屋大阪にも轉任）がそれぞれ鎮座している。これを今人に求むれば東京に塵山翁、摩耶火、駒村、閑古、麻生磯次博士、鞍馬氏らと稍偏在の嫌いあるも、川崎に山沢英雄氏、長野に未知庵氏、新潟に阿達義雄氏、愛知に石田元季、今井柳三氏、京都に糸岡謙堂、宮田正信氏、大阪に溪花坊氏、神戸に鈴木重雅氏、廣島に柳石氏、愛媛に省二翁、熊本に鳴

風氏と四道將軍の如く辺域を圧している。元よりこれ等の人物配置は偶然であり職業や生活環境に左右されたものであるが、四方に分布されている現実はまだことに神秘である。

話題を轉じて柳壇人物の歴史的傳承系統を探つて見るこ

壇の子規門、文壇の漱石門に傑物が輩出したのと同様にしている。劍門岐門の外に三面子、而笑子の系統を引く人士もあつたが、比べものにならないほど前者は圧倒的であつた。斯く劍花坊、久良伎の両雄が多くの人材をその傘下に集めながら、終りまで行を

同身近詠

姫路 池 沢 樂 居

神さまは安過ぎ薬は高過ぎる

靈驗はちようど薬の効く時分

いや軍備ではない武器を持たすだけ

大 阪 橋 本 緑 雨

老人の日記白紙が続くなり

よせ鍋の裾へ二月の風が吹き

老い朽ちてゆく淋しさに酒を呑み

松 山 前 田 伍 健

湯上りにいつそ野暮な冬衣裳

巻き返し打つ波世相とも似たる

頬被り人相により面白し

脚下照顧知らぬではなし評論家

愛人の欠伸え何か食べよしか

とにしよう。古くは明治中興の祖である劍門、岐門から有爲の人材が輩出したことは人々も知る通りである。別段組織的な養成機関があつたわけではないが、自然と逸足が集つて談笑の裡に氣を吐き、相共に切嗟琢磨したのである。俳

共に爲し得なかつたことは諸行無常の感を覚ゆると共に、人情信義の輕薄さに驚かされる次第である。しかし乍ら物事はその表面だけ見たのでは眞相は掴み難いもので、外見では離反したように見える間柄でも内心には脈々として傳

承の精神が漲つていている場合が少くない。一例をあげると三太郎氏は事ある毎に恩師劍花坊の意志高揚を叫ばれ、雀郎氏は久良伎が讃美して措かなかつた江戸時代の俳諧史研究に余念がない。このように一度傳承した川柳精神は牢固として抜くべからざるものがあるのである。人物が人物を生む哲理は這般の消息がこれを雄弁に物語つてい

關西にはまた別箇の傳承系統があつた。六厘坊、柳珍堂等を樞軸とする勢力を傳承して、路郎、日車、青明、半文銭、当百、松窓、五葉、水府紋太氏らの新勢力が擡頭し遂に今日の隆盛を招來するに至つたのである。關東に劣らぬ多士濟々振りて更に次のゼネレーションを養ひ、中堅層の活躍は、非常な期待と信頼がかけていら

界には人物が拂底し徒らに陣笠連の目白押しをかこつ現況であるが、柳壇では東西役者揃いで前代未聞の充実振りを見せている。正に昭和時代の盛事と云うべきであるが、先覚者の水準向上運動、社会化運動、後進誘拔運動に盡された不退轉の努力、高邁なる精神的遺産に対して万腔の感謝を捧げなくてはならない。しかも有難いことにはこれら功績に輝く先覚者達が老來益々かくしやくとして健闘されていることである。師父の礼を盡すと共に乞うて川柳道の眞髓を体得するよう教えを受けるべきである。

三、川柳の宿命と人物

前項の觀察は稍樂觀に過ぎた点があるので、翻つて嚴正な検討を加えながら今後の柳壇人物について考察を進めて見たい。

川柳には三つの宿命がある。その一は非凡でありその二は警世、その三は諧謔である。これは所謂川柳の三要素と裏腹の考え方で、非凡は穿ちの反面、警世は諷刺の轉身諧謔はユーモアの仮面と云う見方もできるが、その根ざすところは深く且つ遠い。非凡か警世か諧謔かこの三つの中のどれかを脊負つていなければならぬ宿命に川柳は身を酒しているのである。試みにこの三つの宿命のきづなから離れた川柳を想像したら一体どんなものが残るであろうか、おそらく短歌を端折つたような心境句か、俳句の亞流をゆく作品とならずに幸いである。三つの宿命について思索し懷疑し或は否定することは自由である。一時的にこの宿命から脱して見ることも勝手

である。がそれらのプロセスを経て結局は三つの宿命を肯定する立場に帰ることが本当である。と覚るであろう。何故ならばこれら三つの宿命は常に新しい開拓精神を抱くものであり、宿命を忠実に果たした作品は常に人間の心にアツピールするからである。

三つの宿命に忠実であるよう多くの川柳家は日夜よく努めているのであるが、その実効はどうであろうか、空弾に終るようなことはないであろうか、厳密に考えて甚だ疑問とするところである。と云うのは三つとも批判の点が辛く、技巧的に至難事であり、且つ大向うの反響が聞き取り難いからである。川柳には小説のような一面があると云われるが、小説には読者があり文学評論家の批判があり、そして文壇やジャーナリズムの評価する商品価値がある。原則的にグレスラムの法則が通用しない。その点川柳は読者の範囲が少く多くは作家同志が読者になつてゐるのである。評論家の批判も少く商品価値と云うものは極めて薄弱である。偶々後世に遺るような名句が僅かに社会へ顔を出す有

様である。小説の駄作はあまりにみじめな運命にあるが、川柳の平凡句は仲間によつて頓死を免れてゐる。以上柳壇に人物が蟬集し難く(勿論比較的問題であるが)宿命の実効が乏しい理由の一つである。柳壇には人物を養成する組織、機関と云うものがない。ただ僅かに吟社、集團があつてそこへ加入することによつて漸次頭角を表わすに至るのが現状である。そうした自然發生的な内部的制度であるため、よほどの機縁がなければ教養文化人が入つて来ない。しかも社会は川柳に警世の句を要求し陳腐な人情風俗詩に止まつてゐることを許さない。川柳は爲政者や指導者階層に反省と示唆とを與える体のものを必要としてゐる。勿論これは庶民の眞実の声を最も藝術的に表現することによつて達せらるるもので、何も爲政者や指導者以上の知性、感性を必要とするものではないが、それにしても容易に至り難い境地である。柳壇に人物が族出し難く世の三嘆を浴びる句の妙い理由の一つである。

川柳は要するにおかしみの詩情を表白する十七音文学である。だから一面において人間社会の風情をたのしむ市井人の手すさび、生活のゆとりであり、寛ろぎの交歓でもある。お互いが一個の平凡人として自由にのび／＼と愉しみ合い、共感し合う趣味とも云える。かかる意味においてお互いは必ずしも出色の人物を求めない。柳壇に人物が重視され難くいつまでも低迷状態を脱しない理由の一つである。

このように考えて来ると三つの宿命は意地悪そうに川柳の前進を阻んでいるようであるが、これを突破し打開するものは外ならぬ柳壇の人物である。端的に云えば柳壇の貧困は人物の貧困にある。人物の後続を阻害する悪條件を共に克服して貧困を救わなければならぬ。以上は一種の英雄待望的思想であるが自分は必ず若い人達の支持があると思ふ。天才、反逆児、異端者が大いに現れることを期待する。そして先進と既往の觀念とに対決しながら再建日本の門出にふさわしい川柳文学を盛り立てて貰いたいのである。



川柳漫釋

(7)

小畑自由朗

「ちよいと」

「、、、」

「いろ男」

「、、、」

「れ」

「、、、」

「火貸してよ」

「、、、」

「あんた、もういゝかげんにあきらめたらごう」

「何をだい」

「ふん、待たるとも待つ身に成るなつてさ」

「何云つてやがるんてい」

「可哀想に」

「そう云うお前も、今夜はかいもくぢやねえか」

「だからさ、同病相あわれむつて云う氣になつたのさ」

「、、、」

「れ、もうそんな薄情者なんか待つて居るより今夜はあつさりとなしと遊ばないかい」

「、、、」

「安く見切つといて上げるわよ」

「よし」

「まあうれしい」

「呀ッ、来よつた」

「駄目々々、もういくらちたばたしたつて今夜はあたしがはなさな人から」

待ち呆けて夜の女に火を借られ

(無骨)

x

「まあ、ぜんざいがあんちよ煮え詰つてしもうとりますな」

「うわあ、こらあかん、早う水持つて来い」

「誰も見たしまへんかいな」

「呀ッ、しもたあ」

「ごないしなはつたんだす」

「水をさしすぎてしもうたがな」

「まあ、あんた、これやつたらまるで鍋の洗ひ汁だすがな」

「しやない、あん粕なとほり込でこまかしたる、あれ、あん粕がないしたんやいな」

「鶏にやつてしまいましたがな」

「無茶すな、早う行て綺麗なこといでもすくうて来い」

客足が途切れせんざい水をさし

(梅里)



雷成舎菅裏と菅子

富士野 鞍馬

神樂堂二六投げれば二八舞い

(タル 四三)

野かけ道地下の青葉の笛を吹き

(タル 四四)

京と江戸かつぎの姿大ちがい

(タル 四七)

遠くも来ぬものかなとて田樂

(タル 五二)

太神樂嫁岩戸はご開けて見る

(タル 五三)

三國一の最後尻は那須野なり

(タル 五五)

親知らず子知らずの道五十間

(タル 五八)

文政五年五月十八日に、二

(タル 五九)

世川柳と、玉章、有幸、雨夕と

(タル 六〇)

菅裏と五人の故人を追善の句

(タル 六一)

会が催されてるところより察

(タル 六二)

すると、菅裏は文政の初めに

(タル 六三)

物故したのであろう。

(タル 六四)

その会の句に

(タル 六五)

らすつと柳多留の序文も書

き、選評もして相当多く句を

見せている。その中の佳句を

拾うと。

たれやらが持句に似たり今日の

番

(タル 七五)

先立ちし子の面ざしに二三町

(タル 七八)

兄弟は富士を枕にするつもり

(タル 八三)

せんべい屋錠をおろさんばかりな

(タル 八四)

り

(タル 八七)

仁王尊とつて投げたる御姿

(タル 九二)

将棋のように並んだはまぢり見世

(タル 一〇一)

五十のと百のと油買いくらべ

(タル 一〇二)

小菊の花も扇屋は八重にちり

(タル 一〇五)

目へさした乳からあちに氣がかわ

(タル 一一三)

り

(タル 一一五)

母母たる故子子たり小式部

(タル 一一九)

都鳥吾妻名所の傳授もの

(タル 一二〇)

時鳥夢を二つに切つて見せ

(タル 一二一)

というようなのがあつた、天保

「おい、課長が呼んでるぞ」

「何云つてやがるんで」

「さつき部長が呼んでるつて云つ

たのは嘘だつたけごんごんはほん

とうなんだよ」

(タル 七五)

「ちえ、部長の前は専務だつたつ

け」

(タル 七八)

「はつ／＼、すまん／＼、而

れ、こんどはほんとうなんだからさ

れ、頼む、君が行つてくれないと

俺が困るんだよ」

(タル 八四)

「あッ、ほら、課長が来よつたぜ」

(タル 八七)

「おいッ、久家君」

(タル 九二)

「はッ」

(タル 一〇一)

「呼んだら何故すぐ来ないのか

れ」

(タル 一〇二)

「しまつたッ」

(タル 一〇五)

四月馬鹿記ぶる結果にならうと

は

(代仕男)

「かいもく聴衆が集つとらんぢや

ないか」

(タル 一一三)

「はい、まことにどうも」

(タル 一一五)

「わしが應援演説に来るちゆこと

「さつぱりわやだすわ」

「ほんまに氣の毒な事だしたな

あ」

「せやさかいに、やつぱりあんな

とこ見たいに、犬を飼うとかなあ

きまへんわ」

(タル 七五)

「ところが、わてとは又其

犬をだすがな」

盗人に備えた犬が盗まれる

(伍健)

川柳雑誌

バックナンパー御入用の方

は往復ハガキに御希望の号

数記入の上聞合されたい

一品料理と生そば

グリル 芝 鶴

上六キヤビトル映

画館 東三軒目

瓶の銀山

大坂市大津區長柄

西區一丁目四

山銀硝子株式會社

電話堀川四四七番

吉廣の作で盆前きりぬける
頼政の三位ぼんとのひるいもの
奥州は赤はらたれぬ女郎なり
(三九)

雷成舎菅裏と菅子
菅裏の子「菅子」は続いて
「柳多留」を刊行していた
が、天保四年に、成田大会の
経緯から、板権を市ヶ谷の奎
文閣に譲つた、その後川柳も
作らなくなつた。七十二編か
(三九)

「おい、課長が呼んでるぞ」
「何云つてやがるんで」
「さつき部長が呼んでるつて云つ
たのは嘘だつたけごんごんはほん
とうなんだよ」
(タル 七五)

「かいもく聴衆が集つとらんぢや
ないか」
「はい、まことにどうも」
「わしが應援演説に来るちゆこと
をピラに書いとかなんだのかれ」
「いえ、めつそうもございませ
ん」
「ふーむ、それで、元首相と書い
といたかれ」
「はッ、勿論お名前よりも大き
く」
演説え元首相にも集らず
(山雨楼)

豆 文 栗 水 愛 沐 古 翻 愛 沒 無 紫 春 ゆ 栗 竹
秋 蝶 堂 論 天 方 骨 論 食 盡 香 柳 する 莊

方選

寒行を終り番茶のうまいこと
寒行の母へ小遣そつと上げ
寒行へ霜夜が迫り来るように
寒行の一人ごてらへ珠数をかけ
寒行の湯氣を吹いてる中華そば
寒行の素足襪を踏にじり
寒行の緒所も今は水かれて
寒行を追越す派手な靴の音
酒の世界へ寒行しやんと佇ち
山門へ寒行絵になる様に來る
寒行へ接待の茶が沸いていた
寒筋を寒行が行くしつけ糸
寒行の念佛小さく滝しぶき
寒行へG.Iさんのへんな顔
寒行も帰つた後の難波駅
踏切で寒行太鼓高く鳴り
念佛を霜柱からちかに聞き
寒行の悟り切れぬに月が落ち
雪の朝寒行に出る母元氣
寒行もネオンの街が良いらしい
寒行に佛壇の灯がばつと燃え

正司 哲水 沐天 貴山 三司 文蝶 紅山 哲水 鮎美 竹莊 香林 紫香 愛論 恒明 烏莊 鵬骨 塔仙 無盡 竹莊 喜久堂 香林

川 嶺
 岡山支部句会 (岡山市)
 一月十三日 於藤本 満年居
 山のたより後樂園の春 泰 秀
 刈見てもう岡山と知る 車窓 美嬌満
 山の土産またかき吉備團子 忠 榮
 宮の子天満屋だけで満了し 友 榮
 夜ふけの満了し 満了し 満了し

性は岡山人と値ふみされ
久米雄

於下閔

石川 侃流葬

[illegible]

中筋は戦後名所と成り上り
名産を車窓から見る 桃畠 一善
岡山をはるかに見つゝ 遍路笠 夢介
鶴見橋こゝから 岡山説明し 風來子
天満屋で買つてあげると 電車道 八ッ茶
岡山ですごなぼつこう高うき 風來子
岡山の電車行先二つだけ 魚々々
誘惑に勝つて京橋引き返し 健坊
家出の娘岡山駅が 大き過ぎ 福子
淋しさは六高マンの影が 消え 三林坊
岡山の米のなる木を 訊れられ 九坡
岡山はよいとこ 京橋鶴見橋 茶々々
金もてば表八ヶ町よいとこ 潤年
文学がお好きで日記抒情めき 仙坊
日記帳買つて今年の意氣を見せ 魚々々
心機一轉過去の日記を灰にする 東岸子
起訴される証拠を日記白狀し 大介
日記帳一人になつた燈に 拈げ 八ッ茶
一泊の事にはふれず日記かき 徳丸
結局はメモに使つた日記帳 潤年
反戦の日記無罪の役に立ち 方風
もう妻も日記の符合知つてをり 吞風
斗病の日記カルテの様にかき 笑氣坊
初日記世界の危機へソッポ向き 英雄
年頃を日記で知つたあはてよう 一善
飲んだことばかり日記は白狀し 忠美

寝て起てたべて又養ふ子の日記
 嫁ぐ日まで窓の日記が捨てられず
 卓上日記会に行く日は折つておき
 こゝまでは他人であつた日記帳
 暗号が思ひ出せない古日記
 四万台一丁ばかり前でおり
 交際え役人根性ぬけきれず
 貧農え鹿爪らしく印を押し
 役人のお世辞を聞いた完納日
 役人という肩書が土座へ來
 出直して來いと役人將棋さし
 忠美

小郡支部會 (山口縣)

十二月二十五日
長野井蛙報

公休は朝寢覺悟の夜を更し
新聞を横目で拜見朝の汽車
退院の朝看護婦は花を活け
應接間金を待つ間の寒いこと
借金で不義理の家をよけて行き
金借りて來て迂闊にも基を敗かし

恭子 ○ 井蛙 幸井 同 蛙

弓削支部句會 (岡山縣)

一月六日 於二葉亭

福島鉄兒報

し、青木こゝして刃指かつ

木を叩くかえり音なり

かゝりて撓挫多ねて不語也

東京そばと

難一とすじ

ノ橋也下央画食道街

丁巳年十一月

大島

梅里の店

三

★大万川柳（第十三回）を募る

兼題「小鉢」
路郎先生選

締切・三月十五日
句数五句以内

発表・三月廿一日
(店内に掲示)

御投句は大万苑・こなたでも

18

神様へ疎縁をわびる 初詣り
初詣今年も復員新つてき 奇松平
初詣り國の平和も新つてき 鳴子
初詣の初めの手を合せ 陽歌
初詣り云つても鈴を鳴らすだけ 白頭
初詣ついでに映画も見て戻り 花子
初詣り靴の音まであらたまり 桃々
初詣生きのびられた礼も言い 鳴子
慰安会女の集い高がしれ 湖月
慰安会孫の踊りに肩が凝り 花子
ストはもう忘れ会社の慰安会 鳴子
一年の慰安ボナス飲んだろか 残昭
こしかけは子供ばかりの慰安会 かね子
特報も解けて希望の船出なり 竹風
スト解除やつと電車が動き出し しの女
まだ生きて居るが解除の記事をよみ 野人
格子なき牢へ解除の通知が来 悠貴女
電産スト嫌はれたまゝ解除され 同
解除にはかゝりもなく老いし父 同
解除組有爲轉變の世を嘆き 多々榮
追放の解除を待たず父は逝き 多々榮
追放が解けて政治へ未練が出 牛歩
孫の守解除されよがさるまいが しげ女
メモケースの解除へ写真班がくる 同
ほろ酔の顔へ夜風が心地よし 同
ほろ酔がひや／＼させる交叉点 一貫
ほろ酔へつい誘われた梯子酒 銀糸

雑川 姫路支部句會 (姫路市)

一月十二日

夷一笑居 一笑報

抱持つ方だけ手袋はめて置き 燕子
小爲替をくんで手袋わすれて来 一
一年の計だけ書いた日記帳 一
身のあかしたてた日記の一こきり 二
へミニスト今は日記を友とせり 笑路
飲んだ日は小さなエックのある日記 和
日記帳の死因を知らされる 燕子
残り福けちな話と思えども 一
笑

お残りを三毛にも分けて老夫婦 笑鬼
不足分出しときましたと便りが来 同
煙草よりスリルですよパチンコ屋 燕子
パチンコでせめて味わう投機心 笑路
パチンコの魅力が汽車に遅れさせ 和
水

雑川 京都支部句會 (京都市)

一月十六日

於祇園仲源寺 村松夢輝報

間借りにも馴れて氣兼ねの段を下り 晴芽
小姑へ映画のブロも隠して 東門
トイレットを借りる氣兼ねも母らしき 三四郎
婚約の指輪氣兼ねの姉がある 小萩
御近所の氣兼ねの中に住みなれて 麗水
氣兼ねして生さぬ母への思遣り 夢裡
取次の電話かざらぬ氣兼ねする 京二
氣兼ねからこじれたと云う婿の嘆 鳥雀
呑みかけに氣兼ねの下駄を寄せ 迷々
クツシヨンへ氣兼ね腰を浅くおき 迷々
煮え切らぬ男眞意を疑はれ いく
母強し疑念の余地もなく生さる 司郎
三昧が鳴る大独樂小独樂さば舞へ 紫蘭
獨樂よ廻れ少年の掌にいつまでも 紫蘭
手のひらの獨樂のうなりへ母の雨 小萩
そんなら獨樂は縁を巻く子の閑志 迷々
源水の獨樂は夕の味の知り 海三
かあさんに見せたい獨樂が掌から落ち 喜由
獨樂ぐん／＼と縁側はせまいら 紫郎
台所の慌しき湯氣が動いてる 豊次
生のびて雑煮の湯氣へ感謝する 茶之助
初風呂へ得意の小唄湯氣に乗せ 蘇海

雑川 詫間支部句會 (香川県)

一月一日

於永康病院 大西迷窓報

取り上げた炬燵に母は手を温め 緑山
天焚残し炬燵の中へしまわれる 重夫
一人者一白隣りで世話になり 寛子
饅餅坊やの指の跡があり 國定子
子の好み聞いてやる程餅が揚げ 綾女

天子の帯る便り餅米足して没け 迷窓
云いにくい話何度火鉢で 百合香
良い客へ主人火鉢をかゝえて来 同
こうして居られぬ火鉢を逃げる妻 迷窓
正月へ晴衣のあけを落して着 信星子

雑川 浜寺病院支部句會 (大阪府)

膳所新三報

ストマイに命を托し今日も暮れ 仙先
新薬の新聞記事を見逃さず 北山
家傳藥博士の科学超越し 一色
睡眠剤持つてただで寝てしまふ 新三
黒糖にすれば薬と名が変り 神谷
終電車重い寝顔が肩に来る 横倉
べんちやらが効かぬ相手をもて余し 田山
べんちやらが知らぬらチツパ切り 松村
二等車の寝顔シカチのカバーを 青道
足音に捨てた煙草が惜しくなり 小沢
狸寝に母はふとんをかけてくれ 賀代
小包の字は下手糞な母の筆 神谷

南区 杏林川柳會 (大阪市)

醫師會 十二月 日

於橋本樓

頓服で夜の往診断らせ 鳥耕
頓服をのんでこめかまた庄へ 比呂史
頓服も持つて居るれと旅立たせ 珊枝郎
頓服でれた間をせめてはつとる 同
物のない頃の頓服思ひ出し 無名林
頓服でおきおきええたこじれよう 捨舟
頓服をキツシユで包む手を覚え 生々庵
本復はしたが家計は楽でなし 烏耕
本復で家の明るさ取戻し 一哲
本復の祝主治医が正座なり 翠香
本復を待ち改めて絞首刑 彈正
本復の祝を兼ねて年忘れ 井村
二次会本復氏だけ敬遠し 比呂史
本復に妻は手離してくれず 無名林
本復が知れて悪友誘いに來 迷路

小兒科 内科 性病科
安岡醫院
安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁浜側
電話南⑤三二四六

人間の分類と世態

長谷川成一先生著
著者は世俗を超越して眞に人間的に生きてゐる人。川柳では一徹と称し「君などは惡貨の一流流行るべし」と金儲けにキユウ／＼たる醫師仲間を諷刺する人。その奇骨、その柳眼が凝つて、戰慄を余所にこの快著となつたもの。一読を薦む。 特價三圓 千八圓

大坂市津島區代
西五丁目二五番地
電話日 六四 三〇三九二
不 朽 洞

本復と同時に又も飲み初め 同
本復をすれば総理がぶささがり 珊枝郎
本復し主治医の今日は釣る話 捨舟
本復へもう飲む話喰う話 同
本復はもう世話焼の類で来る 同
首登に埋り本復札に來る 無名林
一寸飲んで見よかと本復れとぞ 瑞川
本復を呑み友達はもう知つて 路郎
命拾ひしてからもとのケチになり 同
白雪凱々日本が廣う廣う見え 生々庵
釈放の身に初雪の新世界 彈正
戦前は雪見の宴があつたつけ 一捨
法善寺相合傘へつる雪 捨舟
歌舞伎座を出れば積つた暮の雪 同

道ゆきの様に雪ざけ妻とゆき 生々庵
お情の仮及第も親の慈悲 上六
お情の昇給たつた二百四 同
なきけいなさけにお里名をのこし 無名林

日の丸句會 (鳥取市)

一月七日

於会社事務所
河村日満子報

松過ぎてバーマに戻る日本髪 八歩
とか云ふてこの丸番にした貴男 朱歩
一番のバスなまざさい香も乗せて 吾柳
國鉄に赤字出させてバス走る 鉄州
バスは今國境といふ風を受け 同
バスエコンして營の声を聞く 同
バス代にも足らぬ集金して掃り 芳道
工場へ生れ替はりに入るバス 日満子
バスのあとをうめし見る水たまり 小松
おもちゃのぬりだつてくるバスがきき 粗粒
女房にも代議士からの年賀状 遊星
恒例になつてしまつた寝正月 小松
運轉手手袋だけがお正月 遊星
家計簿の赤字私の罪にさせ 至高
飲め飲めと飲めぬ私をだしにして 至高

十二月十三日

於姫久
河村日満子報

社長にも酒の力で言う文句 粗粒
酔うてから言うべきことも決めて置き 伊中
酒が出て税吏話せる顔になり 芳道
まあよい言ふに酒屋は置いて去に なきさ
一合の酒で亭主のきげんとり 貴美女
疎開者を入れて負担が多くなり 芳道
貸問から應援が来るカルタ会 伊中
申し訳程に貸問の床を切り 伊中
六疊の離れを姉がねらつて来 日満子
用足しに挨拶の要る貸問なり 伊中
同情に逆らつて見る斜陽族 同
宴會の幹事屏風は勘定場 喬木
日くばせを悟り只今御留守です 伊中
悟らせるつもり目をばちくし 至高

第二回 讀者川柳大会 (岡山市)

十二月九日

於山陽新聞社講堂
藤本潤年報

これしきの事で夫人の氣が失り 久米雄
酔ざれが乗つて夫人は座を替り 同
有閑夫人顔を貸すのに忙しい 同
夫人より女史で賣れてる妻を持ち 同
夫人今日孤兒院見舞うプランにし 千津子
夫人もうだまうて居れぬスキャンダル 晴之助
氣の強い夫人ヘストの知らず 祝平
まだ見えぬ夫人の席を一つ空け 夜潮
市議戦へ夫人も出ると思せられ 路郎
小説のいゝとこガムの願をとめ 正一
小説に未知の世界を教えられ 道雄
小説にあくびが出てはしまひなり 百々平
小説を寝て読む首は疲れきり 娘句樂
小説のこゝらで加勢欲しくなり 格一
小説の女へ女味方する 聰夢
懸賞を出す月だけの読者なり 利明
川柳の出ぬ日を読者淋しがり 不二老
野心作など読者を逃さない 方大
愛読者同志がつくる趣味の会 翠光
廣告主だけが読者の雑誌なり 九坡
アンケート読まない事も書いて出し 淑郎
読者まだストの抗議が物足らず 風來子
簡単に見出しを読んで飯にする 敬賀
老眼鏡かけて新聞暇が要り 高良
「サーカス」へ読者優待券で入り 曠洋
読禁になつてとみん、読み直し 光志
ゲラ刷りへ読者になつた目を通し 北斗
逆境の今日へ本当の友が来る 茂久朗
悪友の良さが妻にも分りかけ 白柳子
立候補して友達を思い出し 五風
この人はお轉婆だつた写真帳 力葉
友達の方の方に用があり 又州
友達の姉の妹の方に用があり 一善
友達の姉の妹の方に用があり 笑泉
友達の姉の妹の方に用があり 笑泉

ぼんやりとした友達が家を建て 夢介
名案を伏せて社長の案をほめ ひろし
満場一致なら名案にしておこう 谷水
名案はないが當つて砕けるさ 千代男
女から出た名案はほみ消される 秋星
末席に居て名案を言ひおぼれ 紅葉
名案も貧乏人としての智慧 紅月
名案へ金のあるのが横を向き 七面山
作業衣に大きな乳房邪魔になり 福子
横綱を育てた乳房がとこさんと 泰山
疲れ切つた形で母の乳房垂れ たいみ
出来心一生活棒にふる男 秀華
出来心朝の鏡が笑つてい 江得
出来心女房を泣かす事になり 迷窓
戸が開いていたばかりの出来心 春巢
出来心女の本氣もてあまし 東岸子
出来心あとの氣拙い茶をすゝる 美佐女
弁護士が何べんという出来心 萩花
垣根から姿が見えて子は走り 三林坊
立姿踊りの素養ちらと見え 茶々
離れか待つたらし姿のそゝつかし 白竜
振り返る後姿がふり返り たいみ
変つてる姿に友の名が呼べず 小僧
どう向きを変えても姿に入らず 草骨
山賣つて出来た姿で嫁がせる 蔭紅
寄り添うた姿小さくなつて暮 迷窓
突き襟をして姿見を遠ざかる 夜潮
親切な後姿が拜まれる 鉄兒
一生の喜び姿見に余り 青柳
後姿もう振り返つてはくれず 翠光
旅立へ財布を妻が二つ出し 十九平
用心棒暗い所で吞んでい 泰秀
盗人から見れば用心まだ不足 牛歩
用心の傘一日を持て余し 竜飛子
出納所人間様がオリにいる 一歩
用心に犬も家族の中に入れ 風柳
ボーナスは借金埋める額でなし 娘句樂
ボーナスの足らぬ分だけ座り込み 仙坊

版写膳田阪

二五町田芝区北市阪大

会商田阪 式株会

番一九九五島福話電
番四一一三六五

品質優良 タチカワペン



タチカワペン
タチカワセム
タチカワ画鋏

大阪市東区豊後町四八
立川商事株式会社

ボーナスを当に家計簿出来ている
ウランドが生き、見えるボーナス日
ボーナスの額をラジオが云うてくれ
ボーナスが出て小使までも早う去に
ボーナスへ妻と出ても久し振り
ボーナスへ給仕の夢は多過ぎる
スト済む待つはボーナス許りなり
ボーナスがも一度はいい大晦日
ボーナスの額へ労資が疲れきり
倅せな恋ボーナスを出し合つて
ボーナスの出た夜社宅の灯が赤い
ボーナスが多くて吞み少くて吞み
三十四詩

告天子
弓削平
十九平
吟年
春雨
北花
玲嶺
富集
孔昭



てに局輯編

▼寒い／＼と云いながら、余程春めいて来たことはあらず、少くもあたたらしくなつた。老骨にむち打つて旅の川柳を満喫して見たいなどと云うムホン心が頭をもたげている。

▼前号での野介・梨里の対談がうけたので引続いて本号でも大西野介・石田沐天の対談を企画した。野介氏は自他共にゆるした川柳評論家であり、沐天氏は今般この柳社にも所属しないが押しも押されもしない作家である。最近阿氏の対談によつて好読物を提供されたことを感謝している。▼岡病中の福田山雨楼氏は「柳境人物論」に所懐をひききされ▼富士野鞍馬氏は「雷成舎菅裏と菅子」にそのうちくを傾けられた。▼拙稿「新川柳評釈百句」は晩年九月号以来の続稿である。昭和の作品からと云つても、なるべく近詠の佳吟から選ぶことにしたので、忘れた頃に発表することになったのである。諒とせられた。▼本誌は五月号が三〇〇号に相当するので何かすばらしい企画をして、多年の御支援に酬いたいと考えていたが弘く愛読

者の一人々々によるこんでいたのだために記念特輯号を刊行する以外に名案はないと云う結論を得たので、来る五月号を三〇〇号記念特輯号として刊行することに決定、目下編輯上の企画に心血をそそいでいる次第であるから御期待願いたい。(路郎)

不朽洞会から

▼築山快夢起氏(ホノルル市)の選評でハワイタイムスの新春川柳

の天位入賞句は羽佐間柳葉氏の「生きて行く声も明るく朝の市」であつた。内地からの應募は岡山縣の風来子、北星、よしえの三氏であつた。▼小倉へとも氏(一月十六日正午東京上野局にて)は十五日夜、羽田空港に社長の待合を見送られ、その夜は銀座泊り、自称六十八才翁もなか／＼の元氣

▼淡畑胡蝶氏は大阪市大正区鶴町一丁目六番地へ轉居された▼藤本潤年氏(岡山市)は一月二十日の輕部の川柳大会で二月二日は玉野市の神鋼鋸業日比製鍊所の職城グループの句会で柳話をされた。

▼月倉普天氏(兵庫縣)は夫人同伴で、二月六日、七日を志摩観光ホテルで過ごされた由「眞珠海女呼び物にして志摩招く」の句を寄せられた▼浜田久米雄氏(岡山縣)からは本年度の「吉備團子」第四集の計画をしているが春には國鉄俱樂部主催の大会をやりたいと思

ついているとの頼りがあつた▼西尾栗氏は雲仙から「天草へ小手をかざせば四郎めき」の旅情を寄せられた。▼田垣方大氏(岡山縣)は山陽新聞懸賞読者文藝川柳の二月に又々第一席(賞金千円)に入選された▼山根白星氏は札幌市南大通西十三丁目九橋本産業株式会社内に移られた▼直原七面山氏(岡山縣)は一月から吉備平氏と協力して岡警本部内に句会を持つたこと若手が多いので希望を持ち警務局の樹立に突進するそうだが川村好郎氏は四ヶ年間東京出張勤務をされていたが二月に島野工業株式会社の本社(堺市)に帰社された▼水谷鮎美氏(大阪市)は義兄が岡山大学病院へ入院されたのを見舞い一月十八日夜は満年居で川維岡山支部同人と談話▼下記諸氏が一身上の都合に依り二月末限り退会された田辺由布氏、大西柳堂氏、上阪茂氏、小阪慈雨來氏

新会員紹介

一月

白砂旋風氏(ハワイ) 正
快夢起氏推薦
膳所新三氏(大阪府) 正
春巢氏推薦

動 靜

▼本社二月句会は二日午後六時から大宝文化会館で開催▼交助会創立句会(大阪市)は九日午後五時から境川の交助会事務所で開催

▼鮎美句集刊行を祝する会は十七日午後一時から阿倍王子神社で開催五時から小宴▼杏林川柳会は十九日午後七時半から難波新地の鳥井居で開催▼大阪通信病院川柳会は二十三日午後二時から五階講堂で開催▼南海電鉄川柳会は廿六日午後五時から高師ノ浜の南海高等学校で開催以上何れも路郎主幹出席▼今治川柳協会は一月廿日夜、宵明居で句会開催会陽協賛川柳大会(岡山縣)が二月九日桃太郎川柳社主催で開催▼北村白眼子氏(函館市)は「川柳パトシ」を一月廿日「川柳海峽」と改題して続刊された。▼根元紋太氏(西宮市)の兵庫縣文化賞受賞記念出版として紋太作品集「わだち」が二月末

に発刊されると、送費共三〇〇円発行所は神戸市長田区五位池町ふあうすと社▼短詩型文学綜合誌「人間系」が四月に復刊の予定、投句先は東京都小石川局区内白山御殿町八岡本悦子方川柳担当は鈴木久春氏▼金子春風氏(上田市)が近頃病臥されているとのこと一日も早く快癒されることを祈りする▼小田独活氏は日田税務署から一月十六日に中津市殿町中津税務署へ轉勤された▼篠山克己氏(大阪市)が旧十二月三日に長逝された。行年六十八歳。謹悼。氏は吟業と号し尾崎紅葉の門下であつた島半作の別号で川柳を楽しんでいられた。篠山壽彦氏の嚴父。

酒販用アイスクリーム用紙コップ
其他食堂用紙製品一切



特殊紙器工業株式會社
フタバカツプ株式會社

大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 天下茶屋 06 2872 2883

耳鼻咽喉科
半田病院
院長 半田哲三郎(一貫)

大阪市南区長堀橋交又点西・電話船場五〇〇〇番

川柳不朽洞會

指 導

發 行

池 澤 助 郎

長 谷 川 一 徹

笠 原 晴 生

藤 村 晴 生

淺 田 一 作

中 田 守 雄

白 川 朋 吉

中 村 祐 吉

高 村 六 郎

藤 村 雅 光

洞 友 辰 二

島 山 一 步

沖 野 岩 三 郎

龜 井 辰 修

山 本 孝 之 介

山 本 雨 迷

安 川 久 留 美

山 路 閑 古

前 田 伍 健

柴 谷 宰 二 郎

經 子 省 二

藤 生 茂 乃

高 橋 本 線 雨

高 鷲 亞 鍾

沢 田 四 郎

東 野 大 八

浪 武 部 香 林

玲 之 介

上 田 翠 光

木 村 孤 浪

福 田 山 雨

戶 倉 菩 天

寺 井 鏡 々

石 井 古 方

戸 田 白 面

前 山 北 海

古 川 麗 麗

内 藤 草 一 郎

三 輪 晚 翠

水 谷 鮎 美

村 松 夢 裡

大 坂 形 水

藤 岡 至 藝 瑞

井 上 湧 三

北 林 松 代

宮 田 錦 二

西 垣 好 郎

川 村 久 米 雄

築 山 快 夢 起

西 尾 九 栗

永 田 里 九

高 田 抱 逸

小 田 沙 兆

市 岡 曉 舟

三 鴨 美 笑

白 砂 旋 風

石 曾 根 民 郎

正 本 水 香 客

黑 川 紫 花

竹 內 潮 巢

布 川 正 川

尾 崎 方 正

櫻 川 不 水

好 崎 申 仙

菊 沢 小 松 園

逸 見 燈 竿

清 水 白 柳 子

鈴 木 九 坡

小 夷 恒 笑

德 永 雅 美

大 森 風 來 子

岡 下 幽 泉

木 下 幽 泉

福 田 安 夢

中 島 鐵 洲

新 川 博 也

尼 綠 之 助

水 谷 竹 莊

小 橋 柳 慶

弘 津 御 堂

吉 田 圭 井 堂

杉 谷 湖 山

增 田 耕 民

國 弘 牛 休 門

小 林 文 月

大 西 野 介

龜 山 晴 峯

山 根 白 星

種 瓜 平

渡 辺 孫 拙

福 島 正 則

富 岡 淡 舟

山 野 星 登

飯 降 白 香

中 内 翠 芳

西 辻 竹 青

長 野 井 蛙

林 野 萬 光

阿 萬 萬 子

岡 下 萬 子

上 田 春 柳

友 田 貴 山

森 下 愛 論

太 田 良 子

岸 井 可 笑

松 江 梅 里

丸 山 月 創

直 原 七 面

黒 田 笑 泉

上 野 粗 影

狩 野 燕 子

石 岡 正 司

藤 本 潤 年

西 口 如 川

姫 田 夕 鐘

福 島 鉄 兒

直 原 湖 月

黒 田 久 米 女

藤 本 茶 々

塩 浜 一 路

谷 内 一 草

福 本 鷗 骨

松 崎 五 馬

布 村 南 扇 子

榎 南 夏 六

田 中 遊 星

西 山 一 貫

高 山 朗 笑

杉 山 一 貫

家 本 富 至

横 部 牛 步

服 部 九 平

大 森 娛 句 樂

長 谷 川 三 司

荒 木 哲 水

山 中 志 乃 布

桑 原 表 情

成 瀬 月 仙

若 林 草 右

足 立 泰 雄

阿 形 一 杉

坂 田 良 坊

石 川 侃 流

大 森 苑 女

安 岡 瑞 枝 郎

長 谷 川 迷 路

南 木 拾 舟

黒 田 一 哲

牟 田 瑞 川

河 村 無 名 林

木 村 無 名 林

藤 原 虛 水

益 永 貞 女

大 倉 四 案

山 田 季 贊

山 田 鳥 莊

水 本 無 盡

水 田 草 骨

中 村 大 み

山 本 葉 光

東 喜 久 堂

表 天 貧

木 村 千 代 男

田 垣 方 大

那 谷 光 郎

野 村 味 平

木 村 水 堂

勝 所 新 三

募 集

課題吟募集

留守 (十句) 清水白柳子選

靴べら (十句) 村松夢裡選

就職 (十句) 水谷鮎美選

階段 (十句) 杉谷湖山選

毎号募集

近作柳橋雅録廿句 麻生路郎選

川柳塔 (雜詠) 麻生路郎選

文章 (評論・研究・感想其他)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳橋」は一般作家の雅吟を要する。

▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。

▼「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雜誌 第七卷 第三号

一冊 金四〇円

半ヶ年概算 二六四円

一ヶ年概算 五二八円

昭和廿七年二月廿五日印刷

昭和廿七年三月一日発行

大阪市住吉区西代西五丁目二番地

編輯兼發行 麻生 幸二 郎

發行所 川柳雜誌社

無錫日版大阪七五〇

Printed in Japan

NO. 301

大正十三年

七月一日

第三編

第三號

第四頁